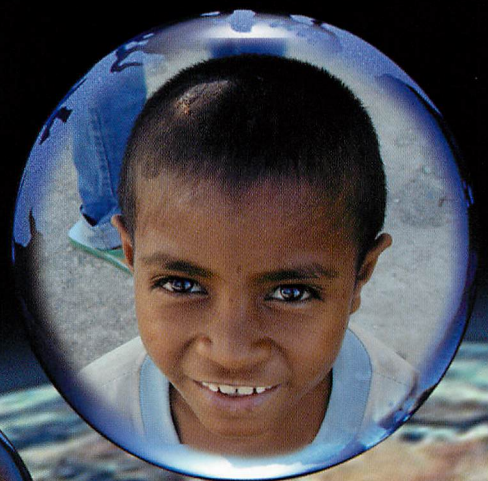


Timor-Leste



# Bunkyo Volunteers 2004





## 首都ディリ周辺



ディリの道路には信号や車線がなかった。



東ティモールで唯一ゴミ処理場を持つディリ。  
ゴミ箱が数箇所設置されていた。



乾季で干上がった川。



ディリのホテルでゴミ回収をするトラック。



昨年の活動で植えたマングローブ。

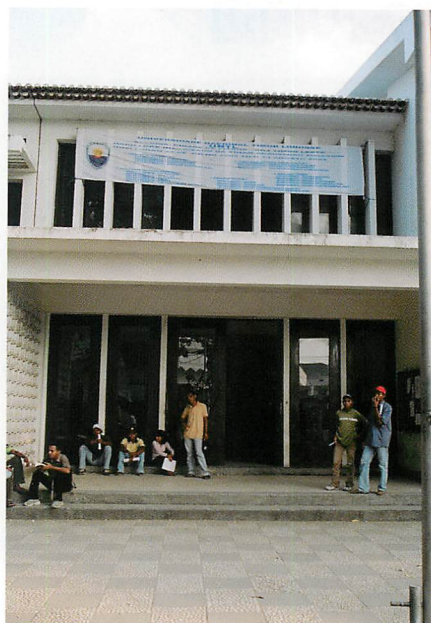


OISCAの農園風景。野菜23種類、果物5種類を栽培している。





国際 NGO、World Vision での自己紹介。



国立東ティモール大学正門。



ディリ近郊のキリスト像。



ドンボスコ・ファトマカ工業高等学校の学生が作った木工の作品。



東ティモール第2の都市、バウカウの路上マーケット。



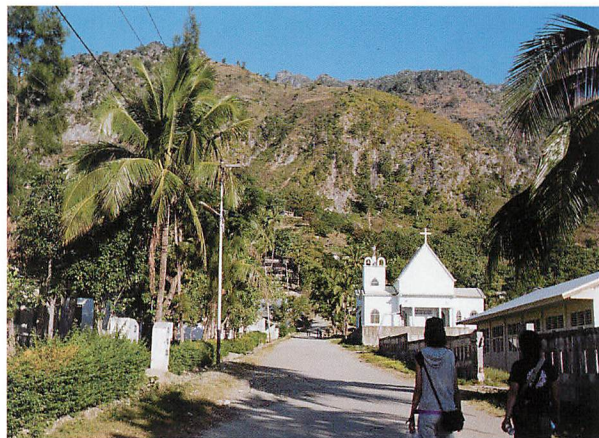
バウカウで食料調達。



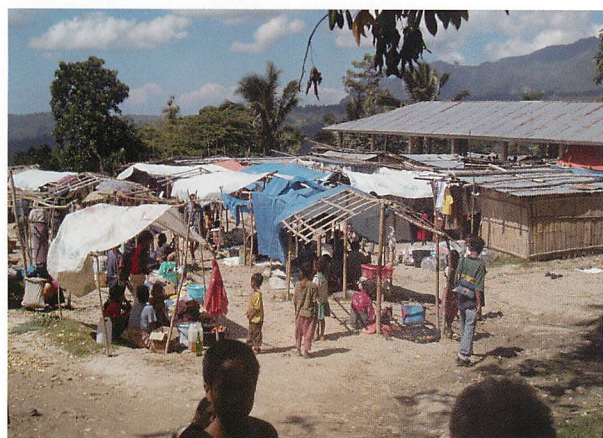
## バギア村の様子



バギア村に向かう道で。海沿いは比較的整備されている。



バギア村のメインストリート。とても緑が多い。



バギア村で週2回開かれるマーケット。野菜や果物はここで買える。



後方に見える孤児院の塗装をしてくれたジョンさん。とてもきれいになった。



バギア聖ヨセフ教会。孤児院の子供たちがミサへ通う。



毎週日曜日のミサへ正装で参加する子供たち。



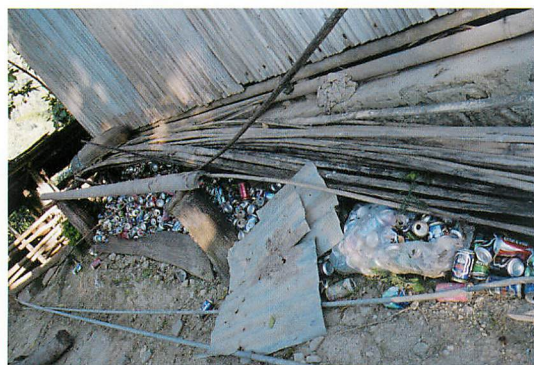
## 子供たちの生活



毎朝孤児院を掃除する子供たち。



集めたごみを燃やしている様子。中には燃えないごみもあった。



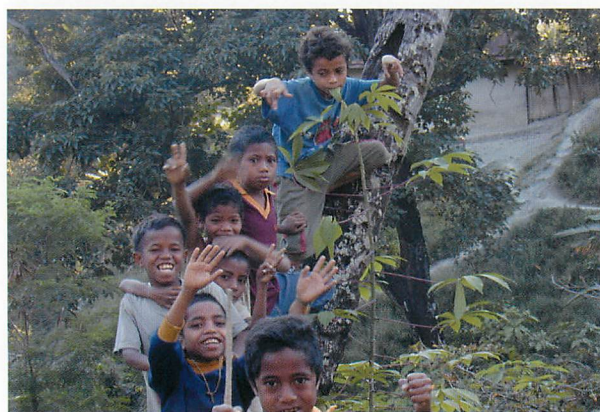
孤児院の裏には空き缶がたくさんあった。バギア村にごみ処理場はない。



左からマリア（小学校の先生）、ジョスティン（孤児院の寮母さん）、生田祐子先生、ジョン（高校の先生）。



孤児院のかまど。子供たちが毎日食事をつくる。



元気よく木登りをする子供たち。カメラが大好き！



バギア村をみんなで散歩。地元の子供たちもたくさん集まってきた。



## バギア村での活動



孤児たちの学費に充てるためのトラストファンド設立。孤児院を管理するオリベ이라神父へ手渡す。



水道管の修理。バギア村の水道は山奥から1本の管で引かれている。



オリジナルの紙芝居で手洗いの重要性を伝える。



紙芝居の後、支援物資の石鹸を使ってみんなで手洗い。シャボン玉を作って遊ぶ子も。



孤児院の布団を全て日干し。叩いても叩いても埃がでてる。



子供たちとごみ拾い。一生懸命手伝ってくれる子も、嫌がる子もいた。





バギア村のリウライ（族長）。



リウライ家で2泊3日ホームステイ。  
現地での生活を体験した。



ホームステイ先でいただいた夕食。鶏肉  
と野菜がメインでとてもおいしかった。



フェアウェルパーティーにて。子供たちから感謝のしるしにタイ  
スもらった。



子供たちから歌のプレゼント。



かわいらしいダンスを披露してくれた。





植林を行ったアフオロイカイで村民へ自己紹介。



植林活動の様子。多くの人が手伝ってくれた。



バギア村小学校へノートや楽器を寄付。中央の女性がマリア先生。



日本で集めた支援物資を積んだトラック。



支援物資を手にする子供たち。みんなとても喜んでくれた。



昨年の活動で作られたかまど。今でも改良され使われていた。



教会前でみんなで記念撮影。「ハイ、チーズ！」



## 2004 春の活動



マングローブ植林では、海水に膝まで浸かり、やりづらい状況が続いた。



しゃがみながらの不慣れな作業は大変だった。



マリアナ（東ティモール代表オリンピック選手）探しでお世話になった OISCA の職員と。



OISCA の農場は研修生が手作業で耕し、技術や知識を身につける。



研修生たちの手によって育てられた質のよいナス。



現地の NGO と一緒に山へ植林。



# 目 次

I.	「雨ニモマケズ」	国際学部教授 中村恭一	1
II.	東ティモール活動報告（2004 夏）		3
	*活動スケジュール		4
	*東ティモールの現況		7
	*全体総括		10
	*バギア村孤児院		19
	*支援物資収集		24
	*バギア村の歴史と社会構造		27
	*現地での調査内容と結果		30
	*学生ボランティアに何ができるか、何をすべきか		41
	*活動の反省		44
	東ティモール国内地図		48
III.	学生座談会		49
	バギア村の地図		50
IV.	活動会計報告		59
V.	お世話になった方々		62
VI.	「現実から学ぶ」	国際学部教授 林薫	63
VII.	「ティモールロロサエとの継続的な友情のために」	国際学部助教授 生田祐子	65





出典 WorldAtlas.com : <http://worldatlas.com/>

東ティモール周辺地図



## 「雨ニモマケズ」

国際学部教授

中 村 恭 一

宮沢賢治が病床にあって、「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」と記したのは 1931 年である。それぞれの国の思惑と身勝手さ故に、世界が第二次世界大戦に向かってひたひたと歩を進めていた時だった。地球上の市民が力を合わせて平和で豊かな人間社会を築こうなどという高邁な思想からは、もっとも遠い時代であったと言える。

そんな時代に賢治は書いた。私の心を捉えて離さないのはこの詩の後段である。

東ニ病気ノコドモアレバ、行ッテ看病シテヤリ  
西ニツカレタ母アレバ、行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ  
南ニ死ニサウナ人アレバ、行ッテコハガラナクテモイヽトイヒ  
北ニケンクワヤソシヨウガアレバ、ツマラナイカラヤメロトイヒ  
ヒデリノトキハナミダヲナガシ、サムサノナツハオロオロアルキ  
ミンナニデクノボウトヨバレ、ホメラレモセズ、クニモサレズ  
サウイフモノニ、ワタシハナリタイ

無惨な戦争が終わって、世界は大きな反省の上に国際連合を創設した。そして最初の活動機関としてつくったのが、戦火によって東や西に残された飢えや病気に苦しむ子供たちを救う機関、ユニセフである。以後次々生まれた国連機関と国連の活動は、まさに賢治が象徴的にうたった活動を実践するためだったかのように見える。世界保健機関、国連農業食糧機関、国連難民高等弁務官事務所、国連人口基金、あるいは紛争調停や平和維持活動などである。

しかし賢治の心にもっと近い活動は、国連機関というより、日本の現在の NGO の活動だと言えるのではないか。東の病気の子供のために、西の疲れた母のために、南にいる死にそうな人のために、そして北で起きている紛争のために、日本の NGO はしばしばくじけそうになる自分に鞭打って、涙を流したり、おろおろ歩いたり、心の中で「世間から見れば、自分は木偶坊でしかないのだろう」とさいなまれながらも、だからと言ってその道の歩みを止めることはしない。賢治の宇宙観も 70 年後の現代を見据えていた。

日本では今、外務省や文科省はもとより、政府を挙げて国際協力、特に国際平和協力分野で“活躍”できる人材の育成に関心を高めている。その一例が、国際協力 50 周年記念事業として 04 年 9 月 30 日東京で開かれた「我が国の国際平和協力分野の人材育成強化における大学の役割」と題したシンポジウム（国際開発高等教育機構・文部科学省主催）である。流れには私も反対ではない。しかし、何か大事なものを見落としているように思えて



ならない。上に取えて“活躍”と書いたのは、政府が目指すのは、日本政府の看板を背負って華々しく国際舞台で“活躍”する人材、あるいは国連などで“活躍”できるスター的人材であって、本当に民衆に直接貢献している地道な NGO のような活動家ではないのではないか、と思えるからである。

国際協力場で活動したいという希望を持っている青年は決して少なくない。しかしこういう青年たちに活動の機会が十分に与えられているかというと、そうではない。あるのは手弁当同然の、ヒデリノトキハナミダヲナガシ、サムサノナツハオロオロアルキ、ミンナニデクノボウトヨバレるのを覚悟しなければ出来ないような、自己犠牲の上に成り立つ NGO の仕事でしかない。その NGO の仕事とて、参加するのは容易ではない。社会にその存在を認められた NGO の専従職員への門は、世間で考えられているよりはるかに狭い。だから個人ベースで、まさにミンナニデクノボウ呼ばわりされながら取り組む他はない。イラクで人質になった個人 NGO 活動家、高遠菜穂子さんの場合は、その実績にもかかわらず政府から厳しく糾弾された。パウエル国務長官らが、個人の国際貢献を高く評価したために、さすがに政府の批判もトーンダウンされるようになったが、国際協力とか国際貢献とかは言葉では美化されても、ひとたび事あれば政府ですらこうだから、世間の認識は欧米のそれとは比較にならない。一般の人が、あるいは企業が NGO を通じて国際協力に参加する意識も一向に育たない日本だけに、NGO の資金不足、民間寄付金不足は慢性的、致命的だ。資金のない NGO は、青年たちを採用し、活動を拡大して日本の国際貢献をより発展させるという NGO の存在価値を充実させることが不可能になっている。

国際協力分野での人材育成は、職業としてのやりがいだけでなく、それに参加する人材の人生が豊かになることが見えてきたときに活性化する。スポーツの世界と同様に、それに参加する人たちが重層のピラミッドを形成し、それぞれの層でやりがい、生きがいが見つかるときに初めて国民的、国家的関心事になり得る。一部エリートだけの育成を目指しても、底辺のない機構の発展は難しい。底辺充実と地元密着で繁栄してきたサッカーの一方で、頂点球団だけの栄光を追い求めて衰退の一途をたどってきたプロ野球の現在の姿には、大きな教訓が潜んでいるように私には思える。

文教大学国際学部は04年春、国際開発協力の専門家である林薫氏を国際協力銀行から教授に迎え、国際ボランティア委員会委員長をお願いした。夏の東チモール活動では、既にコソボ・ボスニア等の紛争後復興地でも学生のボランティア活動の指導で実績を積んでこられた生田祐子助教授と共に現地で指導していただいた。海外ボランティア活動も既に4年。NGO で活動する人、青年海外協力隊に参加する人も生まれている。この人たちが、国際協力は自己犠牲ではなく、喜びだ、生きがいだと思い続けられる時代が来ることをただただ祈るばかりである。

(文教ボランティアズ・アドバイザー、国際ボランティア委員会顧問)



# 東ティモール活動報告

2004年8月3日～8月17日

## 参加者

文教大学国際学部国際関係学科	4年	松本	興太
同	4年	堀	千秋
同	3年	赤城	早穂
同	3年	大竹	環
同	3年	金子	直人
同	3年	兼本	優子
同	3年	竹中	亮太
同	3年	堀内	智文
文教大学国際学部国際コミュニケーション学科	3年	佐藤	愛美
同	3年	皆川	真奈美

## アドバイザー

教授・国際ボランティア委員会	委員長	(現地指導)	林 薫
助教授・国際ボランティア委員会	委員	(現地指導)	生田 祐子
教授・国際ボランティア委員会	顧問		中村 恭一



## 活動スケジュール

8月3日(火曜日) 成田空港 第2ターミナル集合

- ・物資の受け取り

成田発<コンチネンタル航空 CO962 便>

グアム着/グアム発<CO900 便>

バリ島・デンパサール着

8月4日(水曜日) デンパサール発<メルパティ航空 MZ 8480 便>

東ティモール・ディリ着

- ・OISCA(オイスカ)の所長を務めているミランドリンド・アパリシオ・グテレス(通称:リト)さんと新屋敷道保(元OISCA 東ティモール駐在代表)さんの出迎えを受けホテルへ

【午後】

- ・OISCA 東ティモール農業研修センター訪問(モバラ村)センター視察

- ・昨年活動したマングローブ植林地を見学

- ・新屋敷さんと夕食

ティモールの現状報告/今後のティモールでの活動について話し合い

8月5日(木曜日) 【午前】

- ・ミーティング

ギド(GUIDO)さん(通訳兼ドライバー)の紹介/調達物資の確認/大使館訪問について/バギア村入りの予定について

【午後】

- ・ミーティング

<バギア村の予定>植林の日程/ホームステイ先について/バギア村の状況について/フェアウェルパーティーについて

- ・東ティモール大学訪問

学内見学/工学部学部長と面談/大学の説明

8月6日(金曜日) 【午前】

- ・ミーティング

バギア村での活動について/去年の活動(かまど)の現状調査について

- ・日本大使館訪問

これまでと、今後の文教ボランティアズの活動について説明

【午後】

- ・国際NGOワールド・ビジョン(World Vision) 訪問

8月7日(土曜日) バギア村へ出発

- ・バウカウで買い出し



8月8日(日曜日) 【午前】

- ・バギア村教会でのミサへ参加
- ・孤児たちとの話し合い

孤児院の現状について／生活上最も必要としているもの

【午後】

- ・水源の調査
- ・オーストラリア人、Kevin ParkerさんとDon Woodersさんと話し合い
- ・オリベイラ神父と対談

孤児たちの生活について／孤児院支援についての必要性／支援物資の使い道について

8月9日(月曜日) 【午前】

- ・清掃活動
- ・アドミニストレイターと話し合い

これまでと、今後の文教ボランティアズの活動について説明

- ・孤児院の掃除
- ・植林場所確認のため現地視察

【午後】

孤児院の清掃活動

ペンキ塗りについての話し合い

- ・Johnさんにペンキ塗り作業の交渉

8月10日(火曜日) 清掃活動

バウカウへ出発

ラガの教会でオリベイラ神父と面会

- ・サレジアンドンボスコ見学

ドンボスコ・ファトマカ職業訓練学校到着

・サレジオ高専卒業生の辻村さんと会う／修道院にて昼食／校内見学  
ホテル・バウカウ着

- ・オリベイラ神父とミーティング

孤児たちの教育環境について／基金(Fund)を作る

来年以降の活動の提案について討論

8月11日(水曜日) 【午前】

- ・バウカウで買出し

【午後】

バギア村へ出発

孤児院到着

- ・バギア村にてホームステイ



8月12日(木曜日) 【午前】

- ・植林活動
- ・アフォロイカイのリウライ(アントニオ・フィレスさん) 宅で昼食
- ・Grigorio Minezes (75)、Palo Himenes (82) 両氏と出会う

【午後】

- ・ミーティング  
物資仕分け／調査／紙芝居の準備／音楽の練習
- ・バギア村にて各ホームステイ先へ

8月13日(金曜日) 【午前】

- ・ガバナーに話を聞きに行く・孤児院の掃除組・買出し

【午後】

- ・山口県から日本人のシスターとドクターが孤児院へ訪問
- ・紙芝居
- ・フェアウェルパーティーの準備  
フェアウェルパーティー
- ・演奏／ダンス

8月14日(土曜日) ・子供たちと一緒に孤児院の周りのごみを拾う

バギア発

ラガ着 ラガの孤児院に物資を届ける

8月15日(日曜日) 【午後】

自由行動

海内さん(文科省から JICA のプロジェクトに派遣) と夕食

海内さんのティモールにおける仕事についてお話を聞く／文教ボランティアズの活動について説明

8月16日(月曜日) 【午前】

- ・JICA 訪問

文教ボランティアズの活動報告をし、JICA 側の活動についてのブリーフィングを受ける

【午後】

- ・自由行動

現地通訳、ドライバーら協力者を招待しての夕食会兼反省会

8月17日(火曜日) 10時00分 ホテル出発

- ・空港にてティモール・ポスト記者からの取材

文教ボランティアズの活動について説明

東ティモール・ディリ発<メルパティ航空 MZ 8490 便>

バリ島・デンパサール着 解散



## 東ティモールの現況

東ティモール (2004. 8月現在)

面積 約 14,000 平方キロ (長野県程度)

人口 約 92 万人

首都 デイリ

人種 テトゥン族等大半がメラネシア系種族で、その他マレー系、中華系等

言語 公用語は、テトゥン語及びポルトガル語。実用語に、インドネシア語及び英語。その他互いに異なる種族語が使用されている。

宗教 キリスト教 99.1% (大半がカトリック)、イスラム教 0.79%

### 占領の歴史

2002 年 5 月 20 日、東ティモールは 21 世紀最初の国家として独立を果たした。東ティモールは 16 世紀からポルトガルに植民地支配され、第 2 次大戦中には日本、終戦後は再びポルトガル、そして 1976 年からはインドネシアの州として支配された。16 世紀初頭にポルトガル人がティモール島にたどり着いてからほどなくオランダ人も島に上陸した。17 世紀以降ポルトガルとオランダの間に植民地獲得紛争が起き、1916 年になってようやく東側をポルトガル、西側をオランダが統治する植民地境界線ができた。

第 2 次大戦中、オーストラリアは日本が攻撃をする拠点となる恐れのあるティモール島へ軍隊を派遣した。1942 年 2 月、日本軍は連合軍討伐のためとしてティモール島に上陸した。そして各地でオーストラリア軍と戦い、ティモール島全体を占領した。日本軍はティモール人に対して圧政を行った。強制労働、強制供出、暴行。また、慰安所も作った。占領中日本軍により 4 万人以上の人々が犠牲になったといわれている。一方で日本軍はほとんど道のなかったティモール島に道路を敷いた。また、食糧不足が深刻だったため農業指導も行った。

第 2 次大戦後、東ティモールはポルトガルの植民地に戻った。1945 年 8 月 17 日、西ティモールはインドネシア共和国の領土として独立した。しかし東ティモールはポルトガルの植民地のままだった。1974 年 4 月 25 日、ポルトガルでクーデターが起き植民地政策が転換された。東ティモールでは独立をにらんで 3 つの政党がつけられた。このなかの 1 つであるフレティリン (Fretilin) は 1975 年に一方的な独立宣言をし、これを機にインドネシア軍が全面侵攻、76 年にインドネシアの 27 番目の州として併合した。このときから約 10 年でインドネシア軍は東ティモールの人口の 3 分の 1 を虐殺したともいわれている。1999 年、国際的な非難の声が高まり、インドネシアはようやく東ティモールの住民投票を行うことを決めた。8 月 30 日に国連がこの住民投票を実施し、独立支持が 78.5%だった。



この結果が発表されたその日のうちにインドネシア軍に支援された民兵が東ティモールの治安を劇的に悪化させた。このとき全土で 500 人から 1500 人の人々が殺害されたとされているが、正確な人数はいまだに不明となっている。この騒乱で国土は荒廃し、東ティモールはゼロからの出発を余儀なくされた。

## 現在の東ティモール

### <政治体制>

政治体制は共和制となっている。2002 年 4 月 14 日の選挙でシャナナ・グスマン氏が当選し、独立した 5 月 20 日に初代大統領となった。議会は 1 院制で、フレテリンが過半数を獲得している。東ティモールではいまだ行政の能力を身につけた人材が少なく、各国から派遣されてくる外国人に多くを依存している。

### <経済>

1 人あたりの国内総生産は 478 ドル。通貨は米ドルを使用している。ただし硬貨は米ドルと東ティモール独自の硬貨センタボ (centavo) も使用している。主要産業は農業。今後は石油、天然ガスが期待されている。首都のディリでは外国人相手のサービス業が多いが、国連の撤退に伴い状況が悪化しはじめている。現在、失業率は 50%を超えるといわれている。

### <治安>

治安は比較的安定していて、私たちが訪れている間に危険を感じることはなかった。警察による検問が多く、治安維持に貢献していると思われる。しかし現政権や経済状況に不満を持つ人々も存在するため、突発的に悪化する恐れはある。

私たちの通った道路では、首都ディリから第 2 の都市バウカウを抜けてラガまでの北側海岸線は一応整備されていた。しかしそこから内陸バギアまでの道路はひどい状態だった。幅は車 1 台が通れる程度。大きなトラックは通行不可能だと思われる。また、険しい山道なので四輪駆動車でなければ走ることはできない。バギアからさらに奥地へ入ると道路はさらに悪くなる。私たちが訪れたのは乾季だが、雨季に行くのは危険と感じた。東ティモールの道路の大部分は整備が行き届いてない状態で、農作物を消費地へ運んで現金収入を得るための大きな障害となっている。

### <教育>

東ティモールはとても若い国だ。人口約 92 万人のうち約 40 万人が 20 歳以下で、約 24 万人が学生だ。初・中・高等教育の総就学率は 75%で識字率は 58.6%。全国に小学校が 783 校、中学校が 113 校、高校が 44 校、大学は 16 校と 19 の高等教育機関がある。ただし教育



を受けても就職できる人は少ない。

#### <交通手段>

首都ディリの郊外にはたくさんの人が住んでいる。ティモールには鉄道はなく、郊外から街へ出るには一般的にワゴンタイプの車またはトラックの荷台をバスとして使う。しかしこれはおそらく 10～15 人程度しか乗れず、ディリでは交通手段が不足している状態だ。バイクは高価で中流階級以上の人々しか乗れない。自転車も手に入らないため、数が少ない。

#### <医療>

出生時からの平均余命は 49.3 歳。東ティモールではまともな医療を受けることは期待できない。国際機関の職員は重病の場合インドネシアのバリ島やオーストラリアのダーウィンへ移送される。

#### 国連東ティモール支援団 (United Nations Mission of Support in East Timor)

2002 年 5 月 20 日、独立によりその任務を終えた国連東ティモール暫定行政機構 (United Nations Transitional Administration in East Timor) に代わり UNMISET が東ティモールでの PKO を引き継いだ。その目的は東ティモールの安定と行政能力の確保、及び法の執行への支援と治安維持への貢献だ。派遣されたのべ人数は司令部要員 17 名及び施設部隊 2,287 名の計 2,304 名で、2004 年 6 月末までに日本の自衛隊は撤収を完了した。首都のディリではいたるところで国連の車両を見ることができ、まさに国際協力の町であるという印象を受けた。

#### 参考文献

『東ティモール独立史』松野明久 2002 早稲田大学出版部

『ティモール 知られざる虐殺の島』田中淳夫 1988 彩流社

『Human Development Report 2004』2004 United Nations Development Program

外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/>



## 全体総括

学生代表 4年 松本興太

### <はじめに>

文教ボランティアズの東ティモールでの活動も、今回で5回目を終え、皆が無事に帰国の途につくことができた。参加メンバー全員にとって、とても有意義で実りある活動になったことは間違いない。東ティモールの独立間際からこのような若い国を継続して見ている大学グループはそうないだろう。今ここにこのような機会を与えてくれた、国際ボランティア委員会先生方に感謝の意を表したい。

今回活動するにあたり、今までの2年間での活動を継続、強化させることと、そこに今年度の新たな試みを付け加えることを前提において、国内準備に取り掛かった。今回の活動のスタート当初は、なかなか皆の参加意志が固まらず、先に進まないという困難なこともあった。やはり親の反対や、自分自身の不安などたくさんの問題があったのだろう。そして、活動の準備のなかで私は、皆一人ひとりが自分の強い意志と、意見を持ち、それを主張しながらも団体行動の中で協調していくこと、そしてその気持ちを促すことが必要であると思う。今回のチームの中には、ボランティア活動が初めての人や、海外に出ることが初めての人など、多くの初めての経験を、この東ティモールという独立間もない必ずしも安全とはいえない国で行うにあたり、必要になることであり去年の活動からそう感じたからだ。そして、甘い考えや緊張感のない行動は、自分の命を危うくすることにもなりかねないし、迷惑がかかるようなことがあるのはこのような活動の意にそぐわない。誰かのために何かをする、ということにおいて、自分のことができないようでは人に何かをすることなどできるはずもない。現地に赴く以前からすでに活動は始まっていて、ボランティアを行いに行く者としての心構えをしっかりと持つことも準備段階で必要である。

### <国内準備>

まず、今までの活動の継続、強化においては、準備段階にできるだけ今までの活動者から話を聞くことに重きをおいた。ゲストスピーカーとしてサレジオ会での東ティモールにおける開発活動をしている西野さん、辻村さんにも来校していただき、現地で行っている活動や、生活における最近の状況を教えていただくこともできた。そして、そのような中から明らかになってきた部分を、全体ミーティングで話し合った。そしてトピックごとに担当を決め、一人ひとりがひとつの事柄に特化しそれについて責任を持って調べることにした。上に書いた意志と意見を持つということにおいて、一人ひとりが責任をもち担当することはとても重要であるとおもう。今回は参加人数が多いということもあり、一人が二つ以上の事柄を受け持つことがないため、とてもスムーズに行えた。

今年度の新たな試みを考えるにあたっては、やはりこれも前年度活動者などの意見が大



いに参考になった。バギア村のごみに関することや、手洗いなどに関する紙芝居での呼びかけを行うにあたり、非常に参考になる意見をもらうことができた。国際コミュニケーション学科の山田修嗣先生の協力によるごみに関するブリーフィングは、途上国でのごみに関する活動をするのにとっても参考になったものが多い。

準備段階において、東ティモールについての勉強会も数回行った。ゼミなどで研究テーマとして扱っているもの意外は、なかなか詳しいところまでは理解していないので、それを補うために前年度活動者に協力を得て行った。相手を知るということはとても重要であり、それと同時に関心があることを示すことにより、東ティモールの人々と私たちの相互の信頼関係の向上などにもつながるからだ。そして、それは支援者から東ティモールの状況に関する質問を受けたときなどにも、きちんとした説明ができるようになることにもつながる。

そのほかに、ボランティアとは、私たちの活動の意味、どういうことを勉強していかなければならないか、などについてディベートや話し合いも行った。前でも述べたとおり、自らの考えを述べることや、意見を交わすことにより、ひとつのチームとして結束力が生まれる。そして、他の人がどのようなことを考えているかということを理解するうえで、とても重要な作業だった。しかし、なかなか発言する人がでず、一方的に意見を述べるものがあるだけの状況も多くみられた。自らの意思を大勢の前で表明できる発言力と積極性は、一朝一夕でなるものではないが、このような活動をするということにおいてとても重要な要素のひとつであると思う。このような場を多く持ち、意見を述べることへの積極性を身につけることにおいても、今回の活動は有意義であった。

## 募金・物資収集活動

募金・物資収集活動は文教ボランティアズの活動においてとても重要なことのひとつである。第一にこれらは私たちだけの力ではできないからである。私たちが呼びかけることによって、たくさんの人々の協力を得ることはとても重要なことであると同時に、そのような協力なくして私たちの活動は成り立たない。支援者一人ひとりの気持ちがかもったお金なり、物なりはとても大きな意味を持っている。そして、たくさんの人々が東ティモールの人々に協力しているということを伝えていくことで、彼らのこれからにプラスになっていくことは大いにあると思う。

物資収集段階においては、参加者それぞれの母校やアルバイト先、茅ヶ崎市の中学校など地域の人たちにも協力をお願いし、それによって集まったものも少なくない。茅ヶ崎市の萩園中学校では今回の東ティモールにおける活動や、今まで行ってきた文教ボランティアズの活動について紹介する時間をいただき、中学生の前で直接話をする機会も得られた。このようにたくさんの人に私たちが行っている活動を知ってもらい、理解し協力を得ることはとても簡単なことではないが、私たち側もこれからこのような機会をより多く作る努力をしていかなければならない。



## ＜現地活動＞

### 活動全般

当初私たちが想像していた以上に、現地状況の変化はすさまじかったように感じた。特に孤児院の状況の変化にはとても驚いた。そのため私たちの予定していた活動の優先順位が当初よりも低くなる場合もあった。それと同時に、予想外の展開も生じた。それは、現地の NGO オイスカの提案による植林作業や、ホームステイプログラムなどである。組まれたプログラムのすべてを行うにはいたらなかったが、予想外ともいえるこの提案から得たものは大きい。

### OISCA の協力による活動（農業訓練センター見学）

東ティモールに到着し、はじめに OISCA の農業訓練センターを視察し、現在 OISCA が行っている活動について見学した。この農業訓練センターは東ティモールでもとても有名であり、ちょうど私たちが東ティモールを訪れる数週間前にも国連開発計画（UNDP）親善大使である紺野美佐子さんが視察に訪れ、設備や活動状況を視察していった。

この農場の中で一番驚いたのは、農作物に水をやるシステムである。これは非常に進んでいて、東ティモールでこのような設備に遭遇するとは思ってもみないものだった。たくさん種類の野菜や果物は、主要マーケットやホテルなどに卸されている品質のよいものばかりで大変出来がよく、味見したキュウリは実においしかった。また、前年度同様にこの訓練センターでボランティアをする案も提案され、この農業訓練センターにおける大規模な農業ボランティアも計画できるとのことだった。

### 植林活動

農業訓練センターでの見学を終え、翌 4 日 OISCA と文教ボランティアズの今後の協力関係の強化やこれからの日程などを話し合った。新屋敷さんからリトさんに所長が交代しても、お互いにより関係を保つことを約束した。そのような話の中で、OISCA 側から今回バギア村での活動をする際に、植林やホームステイのプログラムを組んでくれたという話を初めて聞いた。これはリトさんと文教ボランティアズのアドバイザー、中村恭一先生との間で今年はじめから話し合われていたことで、私たちにはとても興味深いものだった。

植林については、東ティモールにおいて樹木の伐採などはとても重要な問題であり、住民とともに植林をすることで、住民に樹木の伐採を抑制させるということを目的に計画されたものだった。東ティモールでは燃料を薪に頼っている点においてこの活動は非常に重要な意味を持っている。

実際に植林を行うのは、バギア村からさらに山奥に入った、ハエコネ、オソフナ、アフォロイカイという三つの集落であった。植林前日に現場の視察と現地住民の受け入れ状況を確認するために、学生代表と林先生で視察に向かったが、予期せぬ村人たちの歓迎に遭遇した。実は私たちよりも先に、バギア村のアドミニストレイターがこの植林について事



前に話をつけてくれていたため、一番奥に位置するアフォロイカイのリウライ（集落の長）と翌日のことについて打ち合わせすることができた。その話の中で、植林活動後に村民の前でスピーチをしてほしいとの提案がなされ、私たちはそれを快く受け入れた。

植林当日、天候は曇りで日差しの強さを気にしていた私たちにとって、ありがたい植林日和になった。車の荷台に木の苗を積み込み、まずはハエコネを目指した。ハエコネまでは車で約40分ほどだが、とても険しい道を移動しなければならない。何度かぬかるみにはまりそうになったが、無事に到着した。ハエコネでは学校の裏の傾斜になっている場所に苗を植えることになり、現地の人にそこに適切と思われる苗を渡され、協力しながら植えていった。なかなか地面が掘れなく苦戦を強いられたが、現地の人々はそれを現地の道具で難なく掘り返していくのには驚いた。ハエコネでは100本ほど植えこの集落のリウライと話をし、植林をした記念に訪問者帳にサインをした後、村人に見送られて次のオソフナを目指した。

オソフナでもハエコネ同様の場所に植えたが、時間の関係上シンボリックな形で数本植えることしかできなかった。せっかく用意した苗なので、この集落のリウライに託し、後日植えてもらうようにと数本を置いていった。

最後の集落であるアフォロイカイでは、学校の花壇と中心部から少し離れたところにある傾斜地で植林を行った。植林前に前日頼まれていたスピーチを行い、村民からの盛大な歓迎を受けたのはとても嬉しいことだった。スピーチ後には、村民の中から2人の老人が出てきて、私たちに第2次世界大戦中に日本軍が滞在していたことを話してくれた。彼らはその日本軍と共に、このあたりの道路建設を行ったという。しかし、現在はその道路も荒んで、それがこの村の発展に支障をきたしているとのことだ。交通の不便さはこの村でできた作物の流通に影響を与え、人々のほかの村落への移動もままならない。ぜひこの状況を日本の政府に伝え、道路の補修を日本にしてほしいという要請された。

その後、リウライの家で昼食をご馳走になり、最後の植林地へと向かった。最後の植林地は世界銀行が行った灌漑設備の整ったところで、しっかりと耕されたよい土地だった。ここでもシンボリックな形にはなったが、ひとりが1本ずつ植えることができた。私たちの植林しているところをたくさんの村人たちが見学したが、これが村人にとって木の重要性に気づくきっかけになってくれれば嬉しい。しかし、意識の定着の観点から考えると、引き続きこのような活動を継続することが重要だと思われる。

## 孤児院での活動

### ・孤児院の状況

まず、活動に関連した現地状況の変化の早さについて、これは本当に驚きを隠せないものだった。国内準備段階で聞いていたたくさんの情報はもはやすでに過去の情報であり、私たちが行った今の状況には対応しきれないものばかりでかなりの戸惑いを覚えた。その中で、一番驚きが大きかったのは、孤児院の現状についてである。2年前はWFPの食糧支



援でなんとか食いつないでいるという状況にあったにもかかわらず、今回は、比較的栄養のある食事を適度な量を食べていたように思われる。去年は孤児院の中の年長者が、食事などの身の回りのことを率先して世話しているという状況だったが、今年は孤児院専門の寮母さんがいて、生活や食事などを世話していた。外観も整備され、飾り付けがされ、室内は明るい色のペンキが塗られていた。これはバギア村に支援活動に来たオーストラリア人が行ったということだ。つい2年ほど前までは、支援の行き届かない山奥の村だったが、次第にたくさんの支援団体や国際機関などの支援が来るような状況の変化も見られた。

孤児院を管轄しているオリベイラ神父から、孤児院の状況説明を受ける中で、以上のことを含め、全体的な理解が深まったと思われる。

### ・孤児院支援活動

今回の孤児院での活動は主に、清掃、補修、紙芝居での手洗いとごみ問題の重要性についての意識喚起、バギア村の小学校の先生に委託しての外壁のペンキ塗りなどを行った。孤児院の子供たちといっしょに掃除をしたり、通訳さんに手伝ってもらって紙芝居を現地語で行ったり、学校の先生に委託してペンキを塗ってもらったりと、そのほとんどにおいて私たちはたくさんの方の協力を得て活動を行うことができた。現地の人たちとともに活動を行うことで、地に足のついた活動になったと思う。

しかし、そのほかにも私たちは行いたいと思う活動を用意していた。それは、孤児院で出たごみは焼却しているという話を国内準備段階で聞いていたので、焼却炉のような特定の場所を作ってはどうかという案である。そのためのブロックも用意していた。しかし、その話を寮母さんに提案するが、あまりよい返事は返ってこず、こちらからの押し付けになってしまっただけだと思ひ断念した。

また、この寮母さんから頼まれて行った活動もある。それは孤児院の飾りつけと必要物品の購入、ドアなどの修理などである。あらかじめ工具を持参していたり、折り紙を持ってきたりしたこともありすぐに取り掛かることができた。必要物品としては、テーブルクロスなどを購入した。このような活動は、とても地味ではあったが孤児院の雰囲気を変えることに繋がった。飾りつけされたあとは、以前よりも随分と明るくなったのはみんなが少なからず感じていると思われる。

### ・バギア村におけるホームステイ

今回、バギア村の3軒においてホームステイを行うことができた。これは、OISCAのリトさんの準備により、リウライとリトさんの実家、町の医療関係の仕事をしている方の家が私たちを受け入れてくれた。普通では見ることのできない地元の生活を見て、それに触れられることはめったにある機会ではない。初めに少し、宿泊人数の行き違いがあったが、それ以外は特に問題はなくそれぞれのお宅にお世話になった。

まず驚いたのは、想像以上に室内がきれいだったことである。装飾などもとてもきれい

で明るい印象を受けた。造りもしっかりしていて住みやすそうである。その後、鳥料理と野菜、芋やご飯などでいっぱいになったテーブルに招かれ、みんなで日本の「いただきます」の挨拶をしてご馳走になった。味はとてもおいしく、私たちは夢中になって食べた。後から聞くと、これだけの料理はなかなか作らないのだそうだ。何かの記念などに作る特別なものだということを聞き、私たちはこの行為にとっても感謝し、そして残してはなるまいと心して食べた。

### ・去年の活動のフォローアップ（１年後どのようなようになっていたか）

昨年度の孤児院での活動で、衣料、学用品等の物資を寄付した。それが１年たった今、どのような状況になっているかを知ることが、これからの孤児院に対する物資支援に大きな意義がある。なぜなら、せっかくたくさんの人からの寄付で集まったものが乱雑に使われたり、最悪の場合売られていたりしたときに、私たちの活動の透明性は薄れ信用を失う可能性もある。そのような点からも物資のその後を知ることが重要だと考える。

実際に調べてみたところ、孤児院には倉庫があり、その中に支援として送られてきたものはほとんど保管していると言っていた。私たち以外にも支援物資を持ってきたりする団体があり、倉庫の中はたくさんの服や文房具、ボールなどが保管されていた。その中に私たちが去年持ってきた鉛筆もしっかりと保管されており、鉛筆などは主に学校の授業などで使うので、必要になるまではむやみやたらに使わないようにしているという話だった。

援助慣れという言葉があるが、この孤児院の子供たちには物を大切にすることを私たちが支援として持ってきたものを使ってほしい。そして、そのようなことを私たち自身からも伝えていく努力がこれからも必要となるだろう。

### ・孤児の教育費に対しての基金設立

今回、バギア村孤児院の面倒を見ている神父さんにお話を聞く機会が得られ、その中でどのような支援をこれからしてほしいか率直な意見を聞いた。神父が言うには、やはり当面の食料の問題があるという。しかし、孤児院の食料を保管している倉庫を見せてもらったが、かなり蓄えられていた。けれども、子供の人数や栄養などの面から見るとやはり不安になることもあるし、何より雨季に入ったら買出しなども難しくなる。このような状況を考えると、やはり食料は重要な問題だと感じた。

そのほかには、子供たちの学費の問題がある。１カ月１ドルという日本で考えれば少ない金額ではあるが、彼らにとってはとても重い出費である。実際孤児院にいる子供の大半が文字通りの孤児というより、家が貧しくて預けられた子供達であり、この孤児院にはいれば授業料が少し安くなるという事情がある。しかし、それでさえも払うことが難しいという。

このような話を聞き、今回の活動中に何か支援とできないかと考えたとき、募金で集まったお金で基金を設立しないかとの考えを林先生が提案された。しかし、それには少な



らず私たちは戸惑った。この募金は学用品を支援するという名目で集めたもので、それ以外の用途に使っていいのかということだった。何度か話し合いをし、大きな意味で孤児院支援につながるということで基金設立をすることを決めた。

基金の内容は、はじめに500ドルを預け、その用途を2カ月ごとに写真と共に詳細に報告してもらうということが条件とした。この基金のお金は、100%バギア村孤児院の孤児の学費としてつかわれること。これら内容を記した確約書を作り、それに私が代表として調印した。この神父はこのあたりの教区の責任者であり、とても信頼のおける人物である。そして、何よりこの基金が設立される大きな要因となったのは、東ティモール全体の状況の変化も関係している。それは、東ティモールの銀行システムの発展である。今までのポルトガル系の銀行ではかなりの手数料がかかるなどの不安があったが、オーストラリア・ニュージーランド銀行の進出により、今まで以上に管理に対する信頼が持てると私たちが判断できたことである。

このように、基金を作れたことはとても重要であり、これからの支援の方向性もこれにより発展する兆しが見えたと感じた。行政組織、国家組織、金融組織などの整備はこのようなことを可能にすることもできるのだという一つのケース・スタディとして、私たちはよい方向に捉えている。

### ・ファトマカのドンボスコ職業訓練校を視察

国内準備のときに、ゲストスピーカーとしてきていただいた辻村さんのいるこの訓練校は、東ティモールでは大変有名であり、現在たくさんの生徒が学んでいる。木工科・電気科・機械科・神学科があり、生徒のほとんどが寮生活をしてここで勉強に励んでいる。訪れたときはちょうど夏休み期間だったということもあり、ほとんどの生徒が不在であったが、ブロックの製作過程や、機械科の施設、木工科の生徒の作品などを見ることができた。中でも木工作品はとてもすばらしく、デザインも凝ったものを多数目にした。機械科では車なども修理していて、トラックから作業用機械までかなりのものが修理されている途中であった。この訓練校に来る途中にはよく耕された土地を目にしたが、それはこの訓練校が土壌改良を行ったという話であった。この土壌改良には約30年かかり、豚などの堆肥でなんとかこれに成功したということであった。

このようにこの訓練校では長年にわたり卒業生を輩出し、たくさんの生徒が現在東ティモールで活躍しているという話を聞いた。

### ・DILIにて大使館・NGO関係者・開発機関とブリーフィング

全体の支援活動の合間を縫って、以下のようなブリーフィングの機会を持った。ここでは私たちのバギア村での活動の紹介をし、そして、今各機関がどのようなことを行っているかという話を聞いた。

大使館では参事官と専門調査員の方とお話することができ、最新の安全情報を得るこ

とができた。その話のなかで、戦中にはバウカウはゲリラ活動が活発であり、今も少しゲリラ的なものが存在するということを聞いた。

生田先生のつながりで、NGOワールド・ビジョンの東ティモール事務所を訪ねる機会があった。現在日本人スタッフはいないが、たくさんの人がここで働いている。私たちはこのワールド・ビジョンの主要プロジェクトとして行っている青年への職業訓練の現場を見学することができた。参加している青年は私たちと同じような年代の若者で、とても生き生きしている、という印象をもった。彼らとは互いに自己紹介をし、質問をしたのだが、彼らの私たちに対する質問はとても鋭いものばかりだった。東ティモールが日本のように経済発展するにはどうすればいいのか。などと質問されたのだが、はっきり言ってこのような質問が彼らから出てくるなどとは予想していなかった。彼らの意識はとても高く、このような若者がこれからの東ティモールを動かしていく原動力になるのだなと感じた。ワールドビジョンが進めているこのような次世代の人材育成はとても重要な国際協力支援のひとつであると思う。そのほかにもユニセフとの協力でストリートチルドレンに対する支援なども行っているということである。ティモールの将来を描きながら活動しているNGOの働きを、実感として知る貴重な機会であった。

バギア村での活動を終え、首都ディリに戻ってから JICA の事務所を訪ねた。ここでは私たちの今回の活動報告、それから得た現地の開発に対する要望をお話した。それから現在 JICA が行っているプロジェクトなどについて説明を受けた。

このような機会に、現地で働く方たちと直接話をすることは重要であり、開発の現場の生の話はいい刺激になった。将来開発に携わっていきたいと希望している私たちにとって大変有意義な機会であった。

## <これから>

これからの東ティモールでの支援活動を考える上で一番重要になってくるのは、現地の今の状況をどれだけ事前に得るかということだと思う。途上国ということもあり、連絡の不具合はつきものであるが、それを踏まえたうえでも現地の「今」をどれだけ把握しているかで国内準備などもかなりのことが行える。そして、それは活動の効率性を上げ、より的確に現地のニーズに答えることにもつながる。

次に、私たちの東ティモール（バギア村）支援のこれからについては、この村だけではなく、より広範囲に活動を広げる必要があると感じた。そして、たくさんの現地の方からも、次はこのようなことをしてほしい。なぜ、バギア村だけを支援するのか、ということをしきりに質問されたことが、私たちがこう考えることに大きく影響している。

なぜバギア村だけを支援するのかということについては、これから議論を重ねる必要性が十分にある事柄である。しかし、私たち学生グループができることは限られているし、春や夏の長期休暇しか海外に出る時間がないことも事実である。私たち文教ボランティアズの活動の柱としている事柄のひとつに、継続性がある。長期的開発支援をするにあたり、



どれだけのことをして、どれだけの効果があるかなどを知ることにおいて、継続的にかかわっていくことはとても重要であると考え。限られた範囲の中でより効果的な活動を行うことにおいて、継続性を持たせることは大切なことである。これからもバギア村孤児院への継続的な支援を行っていくと同時に、活動範囲の拡大を視野に入れた東ティモールでのボランティア活動を行っていきたい。

### ＜将来の進路を考えるにあたり＞

私たちは今回の活動の中で、たくさんのかけがえのない経験をする事ができた。それは皆が本当に心から思うことだ。そして、たくさんの人たちとの出会い、孤児院の子供たちとの生活、そのひとつひとつが今も生き生きとよみがえってくる。この経験が一人ひとりの中で、国際協力に対する考えの変化や、これからの自分への何かをつかむことへ発展しようとしている。それは将来の進路のことであったり、自分自身を知ることであったり、これからの生活であったり、人それぞれ違う。しかし、この変化は学生として日本で暮らす中で、必ず生きてくることだろう。

このような経験をこれからどのように生かすかということは、非常に重要であり、それも大きな意味でのボランティア活動というものの一部であると考え。



## バギア村孤児院

私たち文教ボランティアズは、今回で3回目となるバギア村孤児院での活動を行った。今回の活動は、一昨年の夏、去年の春・夏の活動の経験を生かし、期間も2週間のうちの約1週間を利用してバギア村孤児院の活動をメインとして、バギア村を訪れた。

### <孤児院の現状>

バギア村孤児院は正式名称サンホセ・バギア聖ジョセフ教会付属孤児院という。孤児院は、教会の裏の崖の上にあり、急な階段で降りていくようになっている。部屋は男女一室ずつと子ども部屋、食堂、キッチンの四部屋である。トイレは男女別に離れてついている。部屋には二段ベッドが並んでいて子供たちの私物や教科書といったものが置いてあり、寝る場所も決まっている。また、男子の部屋には倉庫があり、去年持っていったボールなどの物資が保管してあった。キッチンのかまどが二箇所あり、備え付けのコンクリートの水槽には山から引いている水が溜めてある。キッチンの水槽は水がいっぱいになると外の水槽にたまるようになっている。この水槽には排水溝がついていないため、内部の清掃は不可能に近い。調理用具はそろっているが、フライパンには穴が開いていた。キッチンの隣には薪割り場所があり、鶏も飼っている。孤児院の前の崖下で、洗濯物を干したりごみを燃やしたりするが、急な坂になっているため危険であった。

孤児たちは3歳から15歳までの子供たちで、リーダーを中心とした年長組みといくつかの決まりごとによってまとめられている。年長者は孤児たちの食事の世話や子供の面倒を見るとともにきちんとしつけもしている。孤児たちに何かを与えるときや行うときは、必ずリーダーと（寮母として雇われている）ジョスティンに承諾を取らなければならない。

孤児たちは朝6時に起床し、まず掃除で一日を始める。主に廊下、トイレの清掃、崖の掃き掃除である。集めたゴミは分別せずに崖から捨てるか、大きなゴミは崖で燃やしていた。トイレは洗剤を使って本格的に清掃している。食事は朝と夜の2回。年長者と子供たちも組み合わせで、当番制で作っている。ご飯に麺と野菜をあえたものをのせたものなど一般的な東ティモールの食事をとっている。残飯がでると犬の餌にしている。また、おやつとしてナッツを炒って食べていることもあった。

遊び場所は教会の前の広場で、最近のはやりはサッカーのようだった。サンダルを履いていない子も少なくないが、元気に走り回っている。また、水曜日の夜には近くに住んでいるスミスさんの家へテレビを見に行っているようで、その日だけは夕ご飯が遅く、7時くらいになる。

電気が通るのは夕方6時から12時で私たちが訪れていた期間は点灯していたが、その前日まで数週間停電だったと聞かされた。近くの警察所がディーゼル発電機で起こしてい



るのだが、燃料切れでつかないことがあるという。時折停電するが、本当に真っ暗であった。孤児たちの就寝は9時で、ほぼ一斉に眠りにつく。

衛生面は悪い。洗濯、水浴びに決まった時間はなく、孤児たちが個人個人で行っている。シャンプーらしきものはあるが、外の水槽にたまった水を使って洗う。水槽には水垢がたまっていて、キッチンの水槽も同じだが洗っていない。また、孤児院に薬の類は一切ない。怪我をしても自然治癒で治すしかなく、病気になっても見せる医者も村にはいない。リーダーのジョスティンはずっと腹痛が続いているという。頭に怪我を負っている子もいたが、消毒したような痕はなかった。手を洗う習慣もないため、調理するときもそのまま行っていた。

子供たちは日曜日には教会のミサに出かける。その時はきれいな服に着替え、村の人たちと式に出る。教会では昼間でも電気が通っていて、マイクが使えていた。また、孤児たちの識字率は予想以上に高い。大抵の子供たちはある程度文字が読めるし、自分の名前などは書ける。さらに年長組みになると日常会話程度の英語も話せる。

夏休みは神父が孤児たちをいくつかのグループに分けて旅行に連れていく。ちょうど私たちがいる間にトラックの荷台に子供たちがたくさん乗って帰ってきたことがあった。そして、入れ替わりで何人かをまた神父が連れて行ったようだった。

私たちはオーストラリアから来た2人のボランティアの男性に会った。彼らは、教会の広場の下にあるハリケーンで壊された学校を修繕するために来ていた。また、今回私たちは会うことができなかったが、孤児院で子供たちにダンスや歌などを教えているオーストラリア人の女性もボランティアで教師として来ているようだった。彼女はビザなどの関係で私たちの滞在中にはバギア村にいなかった。バギア村は、私たちだけでなく何組かの支援ボランティアが訪れるようになっていた。

## <孤児院での活動>

### 大掃除

今回はじめて薫浄剤を使った清掃を試みた。その間、孤児たちは何をしているのかよくわからないため、孤児たちの面倒を見ているジョスティンに薫浄剤の事を説明し、部屋に入らないよう注意してもらおうと共に、メンバーの数名が交代でドアの前で見張った。薫浄剤を炊き終わった部屋には、どの部屋にも10匹程のゴキブリの死骸が見られた。また、孤児院の中の大掃除を行った。孤児達の布団を全部日干しにし、たたいて布団の埃を落とす、各部屋をモップで水拭きする、台所の床は洗剤を使って床磨き、窓のほこりを拭きとる、などが大掃除の内容である。布団をたたいて埃を落とすのは、本当に大変だった。いつまでも埃が舞い上がり、きりがなかった。私たちが大掃除を始めると、私たちの真似をして一生懸命手伝おうとする子供たちがほとんどだった。お手伝いをする教育がされているのか、助け合う事が当たり前であるのか、行儀はかなり良いように思われる。ただ、やはり性格は様々で、掃除が嫌いな子供や、飽きてしまって遊びだす

子供達やいたずらをする子供達もいた。

また、私たちが孤児院に来た時に孤児院の外装のペンキが剥げるなど、かなりぼろぼろであることに気がついたのでどうにかできないかと考えていた。すると、バギア村の小学校の先生でペンキを塗ることができる方を見つけることができた。その方に孤児院の外装のペンキ塗りを委託した。孤児院の外装は見ちがえるようにきれいになり、子供達もきれいになった外装に喜んでいて。外装がきれいになったことで、日々の生活の心持ちにも明るさを与えてくれるように感じる。

## 紙芝居

私たちは、事前にこれまでに東ティモールでの活動に参加した先輩方に孤児院の様子を聞く機会を数回持った。その話の中でごみをきちんと分別・捨てる習慣がないこと、手をきちんと洗う習慣がないことなどを知った。そこで、生活において清潔な衛生面を管理することの重要性を伝えられないかと、この二つのごみをきちんと捨てる事、手を洗うという事に関する紙芝居を作った。

まず、一つ目のごみに関する紙芝居の内容は、ワニの上で人々が暮らす物語である。1人ぼっちでいた男の子をワニが救い、ワニの背中の上で楽しく生活していくのだが、いつしか人々は男の子のために一生懸命尽くしたワニのことを忘れてしまう。ある時男の子は人々のごみのせいでぐったりしているワニに気がつき、男の子と人々は一生懸命掃除をした。するとワニは徐々に元気になり、元の姿を取り戻した。こうして、その後もごみをきちんと片付けるようになり、ワニも人々も楽しく暮らしていく、というものである。東ティモールの国の東側は、ワニが寝そべっているような形に見えることから東ティモールの人々はワニには特別な想いを持っているようで、東ティモールの土地と想定して、ワニの登場を考えた。

二つ目の紙芝居の手を洗うことに関する内容は、淋しがり屋の男の子の話である。1人ぼっちだった男の子にお友達ができ、楽しく暮らす毎日を送っていたが、だんだん周りのお友達が病気になってしまった。さらに、男の子はほかのお友達から避けられるようになってしまった。悲しがる男の子にお医者さんは、手を洗わないから男の子の手にはばい菌がいること、手を洗えばばい菌はいなくなることを教えてくれた。男の子はまたお友達と楽しく暮らせるようにと願って一生懸命手を洗い、他の子たちも男の子を真似して手を洗うようになった。お医者さんの治療の甲斐あって、病気だった子達は元気になり、それ以降は病気になる子はいなくなった。こうして、またもとの楽しい生活に戻りいつも手を洗って清潔な衛生状態の良い環境で暮らしていった、というものである。

この二つの紙芝居をギドさんにテトゥン語に訳してもらい、教会の広場の前に人を集めて読んだ。皆の前で話しながらギドさんは、伝わりやすいよう補足説明をしてくれた。人々は、とても真剣に聞いていたように見えた。紙芝居を読んでいる間、きちんと伝わるかどうか心配だったが、子供たちの真剣に聞いている表情や終わってからの笑顔や拍



手は、本当に嬉しく私たちに安堵をもたらした。紙芝居の後、一緒に手を洗いに行ったが、ついてきた子供は数名だった。聞いていたすべての子供がついてくるものと期待していたので、人に何かを伝えることの難しさを改めて感じた。しかし、数名であっても支援物資のせっけんを使って一生懸命泡立てて水を流しあい、手を洗った。孤児たちの生活を見ていると、たまにはあるが水浴びをしていて、その際シャンプーで頭を洗い、石鹸で顔を洗うなど、現地の基準からすればまったく不衛生というわけではないように思われる。私たちが事前に話を聞いて想像していたよりは、だいぶ衛生面の習慣の変化がみられた。

### 子供達との遊び

子供達とは滞在中、一緒に遊ぶ時間が多かった。追いかけてこや、日本の遊び、また、子供たちは写真を撮られることが大好きなようで写真を撮をたくさんとってあげる、などした。日本の遊びというのは、折り紙や、あやとり、歌いながらリズムに合わせて手を叩く「アルプス一万尺」、「線路は続くよどこまでも」を一緒にやった。特に「アルプス一万尺」、「線路は続くよどこまでも」は男の子も女の子も気に入ったようで、手を私たちに差し出して「これやろう!」と言うように求め、メンバーは何度も何度も歌いながら子供と手を叩いた。言葉は通じなくても子供たちの身振りや表情で十分伝わり合うことができた。子供たちから遊びに誘ってきたり、純粋な笑顔を向けてくれることで、私たちも心を許して同じ目線で接することができた。

### ゴミ拾い

バギア村での滞在最終日、教会周辺から教会に続く道を孤児たちと一緒に日本から持参したごみ袋を持って、ごみを拾って歩いた。子供たちにごみをきちんと処理する大切さをわかってもらおうと同時にバギア村の住民たちにもアピールする意味を持って、教会周辺の道でのゴミ拾いだった。やはり子供達の反応は様々で、ごみを拾うことを嫌がる子、逆に私たちより細かく熱心にごみを集める子もいた。皆、ごみを拾うだなんてきくと嫌がるのだろうと思っていたが、とても熱心にごみを拾う子供がたくさんいて驚いた。しかし、ごみを拾ったすぐ後にごみを捨てている子供もいて、やはりごみに対する意識の低さを感じる場面もあった。拾ったごみは、車の荷台に積んでディリまで持って行き、処理をした。

### フェアウェルパーティー

最終日前夜に、私たちはパーティーを行った。このパーティーには、オーストラリア人のボランティアの方々、ホームステイでお世話になった家族、孤児院の塗装をしたバギア村小学校の先生、村の役場の方、その他私たちの活動を通して出会った方々を招待した。パーティーでは、夕食とデザートをバイキング形式で日本食を中心に用意した。

年長のアニータや子供たちの普段の面倒を見ているジョスティンも、このパーティーのためにケーキを焼いて用意してくれていた。子供達以外の人々には食べ物をバイキング形式で取っていく方法に問題はなかったと思われるが、子供達は、幼いので自分でとることに慣れていないため、バイキング方式は向かないと思われた。また自分から食事に手を伸ばすように教育されていないこともあり、私たちがお皿に取り分けて配った。また、全般的な印象としては、東ティモールの人々は遠慮がちなので、バイキング形式でのもてなしは不向きであるかもしれないと感じた。

食事の後には、子供たちから歌と踊りのプレゼントがあった。さらに始まる前に、子供たちから東ティモールの伝統工芸のタイスという織物を先生2人が首にかけてもらった。タイスを首からかけてあげるということは、東ティモールでは感謝の意味を表しているそうだ。私たちは、子供たちからそんなプレゼントがあるなんて思ってもいなかったからとても驚いたと同時に感動した。子供たちの踊りや歌はかわいらしく、まるで授業参観でわが子を見守る親のような気持ちで見入っていた。感動と子供たちの愛しさで胸がいっぱいで終始感激し通しだった。その後で私たちも事前に練習していた歌と支援物資のリコーダー、鍵盤ハーモニカを使って、鉄琴、ギターを伴奏にした合奏を披露した。子供たちはその間、私たちのことをずっと近くで静かに見守ってくれていた。演奏が終わると、子供たちと一緒にダンスをした。とても盛り上がり、子供たちと本当に楽しい時を過ごすことができた。

### <まとめ>

今回の活動を通して、孤児院の生活は随分と改善されたのではないかと感じた。過去の活動の情報からは、電気は通っているがいつ停電するかわからずほとんど通っていない状態というものだったが、私たちがバギア村に入る前の日までは停電していたようだが、活動中は夜6時から12時までほとんど停電はなかった。また、衛生面に関しても体や頭を石鹸で洗うなど、意識の変化を感じた。2、3年の短期間に変化が見受けられたというのは、とても意義深く思われる。

子供たちは本当に可愛らしい。孤児院を訪れる前、言葉も通じないし子供たちにとって外国人である私たちを受け入れてくれるか、仲良くなれるかなど心配はたくさんあった。しかし、子供たちは私たちをすぐに受け入れ、言葉は通じなくても身振り手振りを使って通じ合うことができた。私たちは、子供たちから言葉では表しきれないたくさんのかけがえのないものをもらった。子供たちは本当に元気で子供たちのたくさんの純粋な笑顔に出会って、私たちも心から笑顔を向けることができた。私たちがこれから生活していく上で、何かつまずいたときに、今日もバギア村の孤児院の子供たちが元気よく生きている、ということは必ず励みになることは間違いない。今後も継続して活動を行い、孤児院、生活習慣、子供たちの成長の変化を見守っていくことが大切である。



## 支援物資収集

私たちは、これまでの先輩方が築き上げたネットワークや、メンバーのネットワークを使ってたくさんの物資を集めることができた。決して我々だけでのものではなく、たくさんの方々からの協力があって私たちの活動は成り立っている。理解・協力いただいた多くの方々に感謝したい。

4年の参加者松本興太のアルバイト先である学童保育で、保護者会の際に時間をもらって、本人が説明したところ、文房具、楽器、衣類などを寄付してもらった。

4年の参加者堀千秋の母校である横須賀市立不入斗中学校、横須賀市立横須賀総合高校で東ティモールの活動を説明し、支援物資の協力を呼びかけてもらった結果、大量の服、文房具、楽器、せっけんの寄付を受け取った。

3年の参加者竹中亮太は母校の茅ヶ崎市立第一中学校時代に担任としてお世話になった先生と連絡を取り、生徒たちに直接話して欲しいとのことで現在赴任されている茅ヶ崎市立萩園中学校で中学一年生を対象として説明する機会が与えられ、参加メンバー5人で中学校を訪問した。支援物資として文房具をもらった。

3年の参加者兼本優子の母校、埼玉県立不動岡高校では担任としてお世話になった先生の協力で高校内で呼びかけをしていただいたところ、相当な量の楽器、文房具、ノート、文化祭で使い終わったカラーボールなどの寄付を受け取った。

その他にも、大学内のボランティア・サークルであるチームワン、エコキャンパス、さらには学生課、教務課職員の方々からも文房具、せっけんをいただいた。また、茅ヶ崎駅で募金活動を行った際に一緒に配っていたチラシを見て連絡をもらった方々から、服と文房具を受け取った。私たちはたくさんの友人、アルバイト先、家族や親戚などからも衣類、楽器、文房具を集めることができた。

今回のプロジェクトで持っていった支援物資は次項に記載の通りである。

(洋服類)

- |       |      |        |      |      |      |
|-------|------|--------|------|------|------|
| ・スカート | 67着  | ・半ズボン  | 173着 | ・半そで | 672着 |
| ・帽子   | 18個  | ・ワンピース | 44着  | ・タオル | 8枚   |
| ・パジャマ | 5セット |        |      |      |      |

(楽器類)

- |            |     |           |     |          |     |
|------------|-----|-----------|-----|----------|-----|
| ・ソプラノリコーダー | 33本 | ・アルトリコーダー | 38本 | ・鍵盤ハーモニカ | 20個 |
| ・ハーモニカ     | 5個  | ・オカリナ     | 1個  | ・カスタネット  | 7個  |
| ・鉄琴        | 2個  |           |     |          |     |

(文房具)

- |          |      |          |      |           |       |
|----------|------|----------|------|-----------|-------|
| ・ノート     | 298冊 | ・ルーズリーフ  | 76枚  | ・スケッチ用紙   | 374枚  |
| ・スケッチブック | 23冊  | ・色鉛筆     | 148本 | ・色鉛筆(セット) | 31セット |
| ・鉛筆(未使用) | 200本 | ・鉛筆(使用済) | 749本 | ・定規       | 63本   |
| ・クレヨン    | 7セット | ・消しゴム    | 78個  | ・分度器      | 2個    |
| ・チョーク    | 1箱   | ・鉛筆削り    | 13個  | ・折り紙      | 約200枚 |

(遊び道具)

- |         |     |         |     |         |     |
|---------|-----|---------|-----|---------|-----|
| ・なわとび   | 10本 | ・カラーボール | 72個 | ・テニスボール | 82個 |
| ・バレーボール | 6個  |         |     |         |     |

(その他)

- |       |      |
|-------|------|
| ・せっけん | 379個 |
|-------|------|

以上

これらの支援物資を11個のダンボールに詰めた。預け荷物として一人1箱のダンボールを担当して飛行機に乗せた。ダンボールの大きさは、縦・横・高さの総計140cm、重さ35kgまでで、行きにバリを経由で1泊する際、空港に10,000ルピア(日本円換算を)で預けた。これまでの活動では、支援物資の輸送費でかなりの超過料金をとられてしまっていた。しかし、今回は会計報告にもあるように事前に西鉄旅行を通して航空会社に私たちの活動の趣旨を説明し、荷物超過料金がかからないように交渉していたおかげで、超過料金が以前ほどかからなかった。

子供達に支援物資を渡す機会は、私たちの訪問が夏休み中だったため、学校が始まって子供たちが全員揃ってから支援物資は子供達の手に移ることになった。それまで孤児院の部屋にある倉庫に保管されることになった。子供達は、去年寄付した物資も含めて鉛筆やノートなどの用具はジョスティンの指導の下で使うときにだけ倉庫から出して、使い終わったらしまっていた。これまでの物資、物を大事に使っていることがよくわかった。また、その倉庫は去年の物資などでいっぱいになってしまっているとのことで、楽器類全て、テニスボール、バレーボール、ノート150冊、定規類、チョーク、鉛筆約300本は、学校への寄付とした。



## 支援物資を集めるにあたって

支援物資を現地に寄贈するという事は、現地の必要性を考えることが重要である。倉庫の大きさもあって、孤児院にすべてを寄付するという事は難しかった。活動の経験者が現地のニーズを詳しく伝えると共に、リトさん、オリベイラ神父のメールアドレスを聞いたので連絡をこまめにとって必要なものを支援物資として持っていくことが必要だと感じた。さらに、孤児院だけを目的とせず、学校などの施設への支援も考慮していくべきだと、感じた。

私たちは、多くの方々から支援物資のご協力をいただき、また私たちの活動や、東ティモールの子供たちのことを理解してもらうことが出来たと思う。私たちの活動を支援してくださった多くの方々に心から感謝している。



## バギア村の歴史と、社会構造

### バギア村の地理的状況

バギア村は、ティモール島の東部、東ティモール第 2 の都市であるバウカウの南東の内陸部に位置する。険しい山々と豊かな自然に囲まれた村だ。バウカウ県に所属し、10 の集落に住む人口 10772 人 2403 世帯で構成されている。「村」とされながらも、東ティモールの中の集落としては中規模のコミュニティである。道路の状態が非常に悪く、車で、首都ディリからは 7 時間、バウカウからは 4 時間とかかってしまう。この村では、週に 2 度ほどバザールが行われる。村人の交通手段は主に、トラックを使った乗り合いバスである。舗装状態が悪く危険な場所が多い道のを、屋根の上までぎっしりと乗り合わせた様子にはずいぶんと驚かされた。事故などで大怪我する人もしばしば出るということも聞いた。私たちの活動では、道路などのインフラ整備に手を入れることは、技術的にも資金面でも不可能というのが現実だと言える。しかし、こういったバギア村などの山間部の地方社会の発展のためには、こうしたインフラの整備が必要不可欠と言っていいだろう。

### バギア村の歴史

16 世紀前半から東ティモールはポルトガルの植民地時代に入る。植民地政策の性質の影響からか、ポルトガルは強い支配体制を敷かなかった。彼らはティモールで取れる『白檀』と呼ばれる香木を手に入れること以外に、それほど東ティモールに植民地としての重要性を感じていなかった。そのため、ティモールの発展というものには力を入れていない。ポルトガルの植民地時代にはインフラ整備はほとんど進まなかった。しかし、彼らが持ち込んだカトリックの文化は今でも根強く残されている。各地域には必ずカトリックの教会があり、住民は毎週日曜のミサを欠かさない。カトリック教会の組織は、早くから確立されており、これまで、地方行政に代わる働きをすることもあった。海外支援的な面においても、カトリックのコネクションというものは大きな役割を果たしている。しかし、少数ながら、プロテスタントやイスラムを信奉する地域も存在する。そこは、カトリックのコネクションを通じた支援を受けづらい状況にある、といった問題も残されている。

このように、過去に植民地だったという歴史的状況から東ティモールとポルトガルとの交流は深い。比較的裕福な家庭で育った人の中には、ポルトガルに留学する人やそれに乗じて、ポルトガルの市民権を得る人もいる。海外からの支援といった面においても、ポルトガルの役割は非常に大きい。

1941 年、太平洋戦争が始まり、日本が東南アジアに侵攻した。かつて同地域を植民地支配していたオランダやポルトガルなどの欧州各国は、東南アジアにおける植民地を次々と失うこととなった。

1942 年、日本軍はティモール島に上陸し、同地域を支配下に置いた。バギア村には日本



軍の軍事拠点が置かれ、多くの日本兵が駐屯していたといわれている。意外と知られていないが、バギア村へ通じる道を始め、現在でも使用されている東ティモールの町や村をつなぐ道路は、日本軍により整備されたものだそうだ。バギア村や近隣のアフォロイカイ村などには、当時日本軍とともにインフラ整備作業を行ったことがあるという人が何人かいた。

当初、日本軍にとって東ティモールは対オーストラリアにおける最前線だった。幾度かオーストラリア軍と戦闘になり、現地人もその戦闘に巻き込まれたこともあったという。しかし、次第に、日本側の戦況が悪化しはじめたところからは、戦闘らしい戦闘はなくなった。度重なる敗戦による日本側の戦況悪化に伴い、東南アジアに展開していた兵士への補給ラインが絶たれ、ティモール島やバギア村に駐留していた日本軍の部隊は完全に孤立状態となった。だが、戦略的な価値から、ティモールは連合軍側に重要視されなかった。孤立状態にあった現地の日本軍は、現地住民とともに農業やインフラ整備などをしながら終戦後に日本に帰るまでの間、そこで暮らしていたという。

戦後、インドネシアが独立し、一時は併合の動きもあったが東ティモールは、ポルトガルの植民地であり続けた。バギア村の中心部付近には、かつて同地域の地方行政を担当していたポルトガル人が住んでいたと言われる建造物が現在でも残されている。当時、バギア村に駐在していたポルトガル人はたった一人だったという。

1974 年のポルトガルで起こったクーデターで、同国の植民地政策は転換された。これを契機に、東ティモールでは、将来的な独立をにらんだ独立派が生まれ、翌年には一時的なものながら、独立を宣言。東ティモールのインドネシア併合を望むインドネシア政府や、東ティモール内のインドネシア併合派との間で、抗争が激化することとなった。インドネシア軍は東ティモールに侵攻し、独立派の住民を虐殺するという、凄惨な行動に出た。当時、バギア村にもインドネシア軍が訪れたが、バギア村のリウライ (村長) は、村人を救うためにインドネシア併合派の政党支持を表明し、それを証明する『証書』を持っていたため、バギア村では人々が虐殺による犠牲者を出すことは無かったと聞いた。このような歴史的背景から、バギア村に限らず東ティモール全体において、反インドネシア感情を持つ人が多いと言える。

その後、長きにわたる混乱期を経て 2002 年に独立。東ティモールは 21 世紀最初の独立国となった。独立後のまもなく、私たち文教ボランティアズのバギア村孤児院支援活動が始まった。過去 3 年にわたり、私たちはバギア村への支援活動を行ってきたが、当初、海外からの支援など、ほとんどといっていいほど受けていなかったバギア村も、現在では様々なところから支援者が訪れ、同地域への支援活動が行われている。主に、地理的に近いことから、オーストラリアからのボランティアが、幾度か村を訪れているようである。村人の生活は、未だに厳しい状態だが、様々な支援により確実に向上している。

## 社会構造

現在、東ティモールでは、地方行政の整備が行われている途中の段階である。完全に地方行政制度が確立され機能されるにはもう少し時間がかかりそうだ。現在整備中の地方行政システムは、地方行政の責任者、アドミニストレーター（知事のような存在）が置かれ、この管轄下にセクレタリー（秘書）がおかれ、政府開発委員会が実際の行政および開発を担当している。この他にリウライと呼ばれる者がいる。

リウライを定義付ける事は難しいが、伝統的な意味合いからすると、リウライとは王、族長など、その地域における権力者のことである。現代的な意味合いからすると村長という、地方行政の責任者を意味する。その歴史は古く、ポルトガルの植民地になる16世紀以前に乱立した小規模な王国の王をリウライと呼んだところから由来する。伝統的にその地域の権力者として代々受け継がれてきたようであるが、現在では王や族長としての意味合いは少なくなっている。民主化にともない現在は選挙で村長を選出している。この村長のこともリウライと呼ぶことがある。それには、実際にそれまで伝統的リウライであった人物が村長に選出されたことが多かったことや、村長という役割が住民にとってなじみの深いリウライの役割と似ていたためではないかと思われる。

アドミニストレーターのオフィスおよび何人かの村民によれば、バギア村の中心集落のリウライに関しては「村民から推挙された村長」と説明されているが、インドネシア占領時代あるいはそれ以前からリウライとしての権威を有していたようである。このリウライ家には、6名が幸運にもホームステイという貴重な機会を与えていただいた。そこで、バギア村のリウライから様々な貴重な話を聞くことが出来た。ちなみに、このリウライの息子は東ティモール軍の司令官であり独立戦争時も、現東ティモール大統領シャナナ・グスマンらとともに、独立派を率いて戦った英雄である。現在このリウライは、日常的な村落の行政に直接従事しておらず、折に触れアドミニストレーターへの助言と村民の相談に乗ることが主な役割のようである。

植林を行ったバギア村の近隣のハエコネ、オソフナ、アフォロイカイの3集落に関しても、リウライと直接対話をする機会があった。これらの村落のリウライはバギアの中心村落のリウライよりはるかに日常的な行政に関与している。特に、アフォロイカイのリウライはUNDPの支援を得て農業省が実施する栽培指導プロジェクトのマネジメント、進捗の監理を行っている。今後、地方行政が施されるに従い、国の地方行政システムとしてのアドミニストレーターと伝統的な自治システムとしてのリウライとの役割分担を明確にしていく必要があると考えられる。



## 現地での調査内容と結果

### <調査項目>

- ごみへの意識
  - ・ どういう物がごみか？
  - ・ なぜ捨てるのか？
  - ・ どこなら捨てていいのか？
  - ・ リサイクルの可能性
  - ・ どうやって捨てるのか？
  - ・ ごみ処理(自治体、政府)
- 村のニーズ(大村落会議)
- かまどのその後(先生1、一般家庭1、村長2)
- 水問題(上水道、下水道、調達)
- 孤児院(人数、不足しているもの、消費財)
- 物資の行方(正当性、平等性、効率性)
- 土地の問題(畑、所有権)
- 最新の情報(変化、新たな問題、解決されたこと)
- 作物の流通
- 製品の可能性(フェアトレード)
- 生活環境(電気、水道、掃除)

### <調査結果>

#### ○ごみ問題への意識

##### (孤児院)

ごみは朝、昼の清掃の時間に集めていた。清掃の時間はしっかりと決まっていた、孤児達全員が参加していた。草を束ねたホウキのようなもので掃いたり、手で拾ったりして集めていた。分別は①燃やせそうなもの(紙、プラスチック、ペットボトル、ビニールなど)②捨てるもの(落ち葉、砂、木、小さなごみなど)③缶、という様にある程度の分別、焼却処理をしていた。しかし、最終的には谷底に捨てられていた。谷底へ捨てる場所は決まっていた、二箇所あった。私達が一緒になって掃除をした時も、私達がゴミを集めて袋に入れるのを、孤児達は何で捨てないのか不思議そうに見ていた。孤児達のゴミへの意識は昨年より、改善されていたが、まだ意識は薄いと感じた。

##### (ホームステイ先)

ごみを集めたら、燃やすと言っていた。その後はどうすると言っていなかったのも、おそらく放置されるか、その辺に捨てるのだろう。

(バギア村)

メインストリート沿いにもごみが捨てられていたので、住民達はあまりごみ問題に関心がない様子だった。また、バギア村の政府開発委員会 (Official Development Committee : ODC) も「ごみ問題は優先度がない。それに何の設備もない」と言っていた。ごみの施設があればごみを集めるかは疑問であるが、何もない状態でごみ問題を考えろというのは無理がある。そもそも、世界の多くの国がそうであるように、ごみ問題は後回しにされやすいことであり、まだまだ開発途上の東ティモールにとってはなによりも経済発展が優先されるのは当然である。

(ディリ)

道路沿いにはごみが捨ててある状況だった。ディリにはごみ焼却場があるらしいが、詳しくは調べられなかった。また、沿道にはいくつかごみ箱らしきものがあつたが、あまり使われている様子はなかった。子供から大人まで、ごみをそこら辺に捨てていたので、ごみ箱やごみ焼却場をつくると同時にごみに関する教育や関心を持たせる必要がある。

○村のニーズ

(孤児院)

孤児達が必要なのは①水②学校の服 (制服) ③靴ーだと言っていた。当時も水は十分にあるようだったが、孤児達は水が欲しいと言っていた。かなり節約して使っていたし、いつ水道が止まるかわからない状況を改善したいのだろう。学校の制服や靴はその後、神父が買ってきていたようである。また、できたら新しいテーブルクロスとドアの修理をして欲しいとのことだったので、これらは行った。他には電球の交換などを頼まれたが、いつ通電するかわからない状態なため、これは断念した。

(ホームステイ先)

道路を良くして欲しいと言っていた。道路を良くすれば、町まで農作物を売りに行けるし、農機も使えるようになる。今のままでは、畑を大きくしても、売りに行けない。私たちはもっと農業をやりたいとのことだった。住民のほとんどが農業で生計を立てているので、道路の改善は直接収入に影響するだろう。現在の道路状況は大変劣悪であり、通行は四輪駆動でなんとか通れる程度だった。さらに、雨季には道路が使えなくなってしまうので、町に行くことが困難になる。流通を道路に頼っているバギア村の人々にとって、道路の改善は急務である。また、ラジオ、テレビがあつても、電波が入らないので、山の上にアンテナを建てて欲しいとも言っていた。情報化社会、グローバル化が広がる現在の世界を象徴していた願いだった。ここバギアには警察駐在所 (Policia) に無線があるのみで、それ以外に外界との連絡手段、情報交換の手段は存在しない。必要になって当然だろう。

(ガバナー)

村のガバナーの話によると、①水の供給②道路の整備③農業の改善だと言っていた。現在の水の供給は山の上から細いパイプで引いてきている状態であった。途中、破損箇所や

水漏れしているところもあり、改善の必要性が感じられた。また、乾季になるとこのパイプからほとんど水は出ず、多くの村人は水汲みに行かなければならない。道路の整備は先程述べたように、バギア村の人々は農作物の売買によって現金収入を得ているため、道路の整備は生活の向上に直接つながる。現在の道路の状況は、四輪駆動でやっと通れる様な状態なので、必要だと思われる。現在の主な農作物は小豆で、1 t = 75 ドルで売買されている。しかし、交通費が往復で収入の半分近くかかるので、収入はたった 30~40 ドル程度にしかない。そこで、高価な果物を作るようにとりかかっている。特にファニリというフルーツは 1 kg = 20 ドルで売れるので、栽培できるように努力している。

#### ○かまどのその後

(Diree Ximenes さん)

かまどは少し使いやすい様に形を変えていたが、きちんと使われていた。新しいかまどになってから使いやすくなったと言っていた。

(Luis Gonjaga さん)

かまどは今でも使っていると言っていたが、見せてはもらえなかった(会えたのが夜遅くだったためと、彼が病気にかかっていたため)。

(現状)

一般の家庭はまだ原始的な置き石の三点かまどを利用していた。OISCA で聞いた話によると、国連食糧農業機関 (FAO) によるかまどプロジェクトが行われているとのことだったが、まだ、普及していないようだ。バギア村で見たかまどの中では孤児院のかまどが一番しっかりしていた。誰によって、どうやって、どのくらいの予算で作れたのかわかれば、今後のかまど改善の参考になるかもしれない。

#### ○水問題

(孤児院)

2000 年に山から水が来るようになった。しかし、時々水が来なくなるので 1 キロ先まで水汲みに行っていた。だが、去年の 8 月に新しくしてもらい、水がずっと来るようになった。この新しいパイプは村とは違う、孤児院専用の水源を使っている。今は基本的に水汲みをせず、水道に頼っているとの事だった。また、台所の飲み水用水槽がいっぱいになると、体を洗ったり、洗濯をしたりする水溜めである外の水槽に流れるようになっていた(水の再利用)。下水は地中までパイプが埋まっていて、その中へ流れるようになっていた。水の供給についてはかなり改善しているようだったが、衛生面の問題は残っているので、衛生について考えることが必要である。

(ホームステイ先)

山から水を引いているが、私たちがホームステイする前日から、水が来なくなったので、8 月 10 日から水汲みに行っているとのことだった。汚水はやはり地中へと流れて行く。特



にトイレの汚水は花壇や畑の下に行くようになっている。まだ、乾季になったばかりのためか、それほど水の供給は深刻な問題になっていないようだった。

#### ○孤児院について

正式名称：The Orphanage of St. Joseph Church in Baguia  
(サンホセ・バギア聖ジョセフ教会付属孤児院)

人数——39人（訪問時）

世話神父やジョスティン（世話係）、孤児院の隣りに住んでいるルイス（Luis Gonjaga）夫妻がしている。誰もいない場合は、アニータ（年長者）を中心に生活をしている。神父やジョスティンにより厳しい指導のもと、規則正しい生活を行っている。起床、就寝、食事、昼寝、遊び、掃除の時間が決まっている。この孤児院には中学卒業の年齢までいることができる。また、この孤児院にいる子供達は親がいないのではなく、家庭の事情や交通の不便により学校に行けない子供達もいた。その子供たちは家族から預かる形で神父が面倒を見ている。だから、夏休み中は親元に帰る子供もいる。親元に帰れない子供達は神父と一緒に旅行に行ったりもしている。

#### ○物資の行方

（孤児院）

小さい子供もいるため洋服の全ては把握できないとのこと。しかし、倉庫には去年文教ボランティアズが寄贈したとみられるボールや文房具が保管してあった。ボールは月曜日の16:00~17:00までの間だけ貸し出され、文房具は学校が始まったら必要な分だけ渡ししている。これらについてはしっかりと管理がされていた。また、サイズの合わなかった服がダンボール三個分近くあった。使えない物資はただのゴミになってしまうので、使える物資を厳選する必要がある。楽器などはいくつかオーストラリアからきている音楽の先生が持っているようだが、会えなかったので詳細は不明。

（Luis Gojaga）

昨年渡した物資もお金も子供達のために使ったと報告があった。すべての管理は難しい様子に思われる。お金の用途について詳しく聞いたかったが、いろんなことに使ったとの報告だった。

#### ○土地の問題

東ティモール政府によって区分がされたとのことだったが、まだはっきりしていないことが多いため、住民とリウライ、アドミニストレイターらの話し合いで管理がされているようだ。しかし、多くの土地が誰のものというわけでもなく、みんなが利用しているようだ。まだまだ、問題も多く、難しい問題ということである。

### ○最新の情報

バギア村の人口(10 集落)――10722 人(2403 世帯)

孤児院のある集落は 1866 人(239 世帯)

去年の状況とはかなり変わっていた。水道や電気はかなり改善されていて、私たちが孤児院にいる間は停電もなかったし、遠くに出かけた水汲みも必要なかった。また、今まで誰からも支援されていない村としてこのバギア村を支援してきたが、他のいくつかのボランティア団体、政府機関、さらには世界銀行や UNDP などの国際機関などが支援をしていることがわかった。特に、政府から派遣されたアドミニストレイターがいることには驚かされた。バギア村にも政府機関ができ、そこを中心に発展していくのだろう。

### ○作物の流通

バギア村でもいくつかの商店があり、そこで売っているものは町と大差はなかった。また、週に 2,3 回マーケットが開かれており、生活に必要なものは十分まかなえそうであった。また、バウカウまで作物を売りに行くことも可能だ。しかし、私達が訪れたのは乾季であったため道路もなんとか使えたが、雨季になると道路が使えなくなるようで、食料もストックが必要だ。流通が道路に依存しているにも関わらず、その道路がしっかり整備されていなかった。

### ○製品の可能性 (フェアトレード)

可能性はあった。現地では自分の服を作るぐらいの織物産業(タイスなど)はあり、トレーニング次第では何とかなると思われる。しかし、流通は道路中心なので、道路の改善ができない内は難しい。

### ○生活環境

電気はバギア村にある発電機で発電していて、18:00~24:00 の間は通電していた。しかし、私たちが行く直前までの 3 週間近く停電していたそう。また、去年は発電のためのディーゼルを買うお金がなくて発電ができなかったという。水道は少し改善されているようだった(少なくとも孤児院は)。森林については特に規制やルールはなく、伐採して終わりという状態だった。また、バギア村では子供の 75%が学校に行っているが、25%は卒業できない状態である。インドネシア統治下の方がまだマシだったと言っていた。

去年と比べれば生活環境はだいぶ改善されていて、東ティモールが発展しているのを感じることができた。

## <バギア村の長期的な開発について>

### (1) 現状

#### ① インフラについて

##### ○水道

孤児院、ホームステイ先、アドミニストレイターとの話でも、まず問題として挙がるのが水に関してである。人間は水なしでは生きていけない。飲料水、生活用水、農業用水…。水は人間にとって必要不可欠なモノである。しかし、バギア村ではその水が不足している。東ティモールは熱帯モンスーン気候に属し、雨季と乾季があり、乾季にはほとんど雨は降らない。私達が滞在していた2週間は一度も雨は降らなかった。川の水は干上がり、地面は乾燥していて砂埃が舞っていた。そんな状況下で水を確保するのは困難を極める。バギア村にも水道があるのだが、乾季の間は水が供給できなくなってしまうことがある。原因はおそらく、水道パイプの老朽化による水漏れと、水源の確保であろう。水道パイプは直径2～3cmで、5km先の山の上から引いている。パイプは道路の脇に置いてあるだけで、おそらくメンテナンスも修理もされていないだろう。実際に水源調査の途中に水漏れしている所が数箇所あった。これでは、村まで水が届かなくて当然だ。もうひとつの原因が水源の確保である。現在の水源は集落の中心から5km先の山の一箇所のみである。しかも、この水源もきちんと調査された水源かは疑問である。

##### ○道路

水の次にあげられるのが道路に関してである。首都のディリから地方都市バウカウまでの道路は舗装されているのだが、バウカウからバギアまでの道路のほとんどは舗装されていないし、整備もされていない。私達も四輪駆動で激しく揺られながら移動した。また道幅も狭く、対向車とすれ違うのもやっとである。幸い、私達が活動したのは乾季のため問題なく利用できたが、雨季になると道路の利用ができない事も少なくないそうだ。東ティモール、特にバギア村では流通は車に依存している。農作物を売りに行くのも、商品を買うに行くのも車なしでは不可能である。それにも関わらず悪路のため、多くの時間がかかり、危険も伴ってくる。ましてや、雨季には使えなくなってしまうのだ。バギア村の人々にとって、道路は大切なライフラインなのである。

##### ○電気

バギア村では電気は村の電気センターで発電している。村人がお金を出しあって燃料を買い、ディーゼル発電を行っている。通電時間は限られている。去年などは燃料を買うためのお金がなくて、発電できなかったこともあったそうだ。また、発電機の故障も多く、私達が訪れる前日まで3週間ほど停電が続いていたそうだ。また、すべての民家に電気が通っているわけではなく、集落の中心部で、燃料費を払える所だけが電気を使える。使えらるといっても、各家庭に明かりが一つ点く程度である。このためか、電化製品がないため



か、あまりバギアの人々は電気に必要性を感じていないようだった。

## ② 環境について

### ○森林

東ティモール全体で、森林の伐採による環境悪化が起きている。東ティモールの燃料のほとんどは薪でまかなわれている。このため、薪確保のための森林の伐採が各地で行われているのである。いくつかの山ははげ山となってしまっている。バギア村ではそれほど顕著に見られなかったが、アドミニストレイターも森林の保全の重要性を示唆していた。後でも述べるが、東ティモールの土地所有権はまだはっきりしておらず、誰のものかわからない土地が多い。このような土地をどのように管理するのが難しいとのことであった。また、伐採した後のケアをすることがないので、植林の必要性があるだろう。しかし、植林後の管理や育成、計画的伐採などを行えるようになるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

### ○ゴミ

ゴミについて、東ティモール人は関心がないようだった。ゴミについての活動は一昨年、去年とやってきたことだが、定着は難しいようだ。これは首都ディリでも同じだが、知らないゴミはそこら辺の道端に捨てている。これが東ティモールでは当たり前になっているのだ。孤児院でも掃除した後のゴミを谷底に捨てていたし、一緒になってゴミ拾いをしたすぐ後から、ゴミを捨てていた。まずはゴミへの意識を持たせることが必要なのだろう。しかし、アドミニストレイターは「ゴミ問題の重要性は低い」と言っていた。まずは生活の改善が重要であり、ゴミのように直接生活に関わっていない問題を解決する必要性はないのだ。また、ゴミ処理施設がない状態でゴミ問題を解決するのは無謀だろう。

## ③ 産業について

### ○農業

東ティモール全体でもそうだが、バギア村の人々のほとんどが農業で生計を立てている。基本的には自給自足の生活だが、現金収入は農作物を売ることによって得ている。ほとんどの人が、乗合トラックに乗ってバウカウまで行き、作物を売ってきている。平均耕作地面積は一世帯あたり1 haである。主な作物は小豆であり、1 ha 当り1 tの収穫になる。小豆は1 tで約75 ドルになる。一時に売るのも、運ぶのにも限界があるので、一回の売買で100kgが限界だ。100kgだと7,5 ドルになるのだが、バウカウまでで往復4 ドルかかる。つまり、利益はたった3,5 ドルにしかないのだ。このため、現在では高値で売れるフルーツの栽培に力を入れている。

### ○その他の産業

農業以外の産業では織物業(タイスなど)がある。現在は自分の着るものを作る程度のも

のだが、トレーニング次第ではフェアトレードの可能性もあるとのことだった。また、バギア村にはゲストハウスがあり、ここには外国からのボランティアなどが寝泊りをしている。民宿のようなものなのだが、観光産業の起点になる可能性もある。

#### ④ 教育について

バギア村の子供達の 75%が小学校に通っている。途上国にしてはかなり高い就学率である。国家予算の約 20%が教育予算にあてられているだけあって、東ティモールの教育への意識はかなり高いようだ。しかし、バギア村の小学校に通っている子供達の 25%が卒業することができずにいる。原因は授業料が払えなくなってしまうことからだ。授業料は小学校が月 1 ドル、中学校が月 2 ドルである。それほど高いように感じないが、現金収入は一世帯で月 3, 5 ドル程度である。授業料が払えないと言われても納得する。実はこの料金はカトリック系の私立小学校の料金であるため少し高めである。公立の小学校は 2 ヶ月で 5 ドルと私立の 40 分の 1 の料金で済む。しかし、公立の小学校の数は少なく、多くの子供達がカトリック系の私立小学校に通っている。また、通学が困難なために学校へ行けない子供達もいるようだ。私達が活動した孤児院の子供達の何人かがそうであるように、家が学校から遠いために通えない子供も少なくない。

### (2) 改善方法

#### ① インフラの整備

##### ○水道

まずは生活用水確保のために水道パイプの補修が急務である。しかし、これには問題がある。今回の水源調査やオリベイラ神父の話でわかったことなのだが、水道パイプの水漏れ箇所を利用して生活している人もいる。彼らのような人々を十分に考慮する必要がある。次に水源を増やすことが必要だろう。村で一つの水源だけに頼っているのでは、もしもその水源から水がなくなってしまったとしたら供給ができなくなってしまう。私達が訪れた孤児院では村とは別の水源から、独自の水道を使用していた。そのため、村の水道から水が出なくなった時でも、孤児院の水道からは水が出ていた。水源を増やすことにより、水の供給に安定感が出るだろう。また水源を増やすことによって、農業用水にも利用できるようになる。これにより、灌漑や乾季時の水遣りが可能になり、農業の生産性を上げ、生活の向上につながるだろう。

##### ○道路

バギア村はただ 1 本の道路が不通になると、完全に孤立してしまう。人の往来、作物の流通、情報の交換などすべてにおいて道路がネットワークになっている。このため、道路の改修は村人達が思っている様に必要なのだ。雨季になって道路が使えない間は物流がストップしてしまうため、孤児院では食料のストックも用意されていた。物流がストップし

てしまうということは、作物を売りに行くこともできず、この間現金収入はないということだ。そんな中で学費を払い、生活をしていくのは困難なのだ。しかし、道路の改修には莫大な費用と月日が必要であるし、雨季のある国では道路の補修も難しい。現に、バギア村の一部の道路が世界銀行のプロジェクトによって、改修されたそうだがあまり効果はなかったように感じた。バギア村の道路のほとんどが太平洋戦争時に日本軍によって造られたままの状態からも言えるだろう。しかし、道路の改善は生活のすべてに大きく関わってくるので、解決されなければならない問題だ。

## ○電気・通信

バギア村の人にとって電気の必要性はあまりないようだ。だが、ホームステイ先のリウライが言っていたのが、山の上にアンテナを建てて欲しいとのことだった。テレビやラジオを持っていたても、アンテナがないため見るができないからだ。テレビやラジオが見られるようになれば、最新の情報が得られるようになる。雨季に道路が使えなくても、情報は常に得ることができるのである。情報化が広がる世界の中で、バギアもその流れから取り残されずに済むのだ。テレビやラジオを使用するためには電力が必要なので、電気の供給を安定させる必要がある。また、アンテナが立つことによって、携帯電話の使用も可能になる。通信手段を警察無線だけに頼っているバギア村の人々にとって、情報のやり取りが容易になるだろう。

## ② 環境教育

### ○森林

水不足に悩むバギア村の人々にとって森林の保全はしなくてはならないことだろう。森は天然のダム、と言われているように保水の役割も果たし、雨季には洪水防止の役目も果たすのである。また、燃料を薪に頼っている東ティモールの人々にとって、森林が減少することは薪の不足を招く。ここで、必要となってくるのが環境教育である。計画的伐採、植林などを行うためには意識とある程度の知識が必要である。今の東ティモールの人々が知識を持っていない。だから、まずは教育から始めなくてはいけないのである。しかし、これだけでは解決にならない。土地所有権の問題もある。土地の所有権は近年、東ティモール政府によって定められたが、まだ浸透していない。この土地問題を解決しなければ、森林の管理や計画的伐採も不可能なままだ。

### ○ゴミ

これもまたバギア村では重要視されていない問題だが、改善すべきことである。今、日本や目覚ましい発展を見せている途上国で問題になっているのがゴミ処理問題である。先進国や経済発展し始めた途上国が取り組んでいる問題にまだまだ発展途上の東ティモールに取り組めと言うのは酷なのかもしれない。しかし、日本などの国のように環境悪化を引き



起こしてから、解決が困難になってからでは遅いのである。なので、まだ開発途上のうちから取り掛かって欲しいのである。我々がそうであったように環境を後回しにして開発を考えるのはやむをえないのかもしれないが、地球のためにも全世界が環境を考えなければいけない時が来ている。物があふれる前に、ゴミ制度やリサイクル、ゴミ処理場の建設をして欲しい。

### ③ 農業改善、土地問題解決、新たな産業

#### ○生産性の向上

今、進められているのが農業の生産性を高めることである。これは主に品種の改良や、機械の導入、技術享受である。土地所有権で問題の残る東ティモールのなかでも、山間で生活するバギアの人にとって、耕作地を増やすことは困難である。そのため、品種の改良や技術享受により、同じ面積のまま収穫量を増やすことができるのである。また、機械の導入と技術享受によって、農業での労働時間の短縮ができ、他のことに時間を費やせるようになる。しかし、これには問題がある。大量に生産できるようになったために供給の量も増え、結果的に値段が下がってしまい、意味がなくなってしまうということだ。需要と供給のバランスを考えながら生産することが必要だ。

#### ○高級作物の生産

もう一つの柱が高価商品を生産し、販売することだ。現在はフルーツの栽培に力をいれている。特に、ファニリというフルーツは1kg当り20ドルで売買される高級品なので、バギアの主要作物にしたいという意見があった。しかし、これにも問題がある。高級作物は数が少ないから高いのであって、いくつもあれば、高級作物は高級作物ではなくなってしまうのである。よって、一概に高価作物をたくさん作るのが良いとは言えない。

#### ○新たな産業

新たな産業として伝統的な織物業(タイス)がある。今までのように、自分の為だけに生産するのではなく、売り物として生産するのだ。今回のボランティア活動の一環としてフェアトレードの可能性の調査もしてきた。まだまだ、一つの産業として成り立たせるのは難しいかもしれないが、今後のトレーニング次第ではどうなるかわからない。農業の副業としてやっていける可能性は高い。

また、観光産業があげられる。一般の家庭を民宿のようにするのである。バギアには自然もたくさんあり、涼しく、生活のしやすいところである。観光地になりうる可能性はある。しかし、ここでも問題になるのがなんといっても道路である。道路の整備をしないことには観光客を呼ぶこともできない。他にも、水道、電気、ゴミなどを整備する必要がある。

#### ④ 教育環境の改善

バギア村の 4 分の 1 の小学生が卒業をすることができない。原因の一つに授業料が高いということがある。そこで、もっと授業料を安くできないかということだが、東ティモールの財政上、困難であろう。それに、海内さんが言うには「ある程度の授業料を払うから、子供を学校に行かせようとするのであって、授業料を安くしすぎたら、親は学校に行かせようとしなくなるかもしれない」とのことだった。確かにこういう考え方もある。しかし、授業料が払えないのも事実である。せめて、もう少し授業料を安く抑えるか、公立の小学校を増やすことをしなければならないだろう。小学校を増やすことは建設費、教員の給料、教科書代など多くの資金が必要になってくる。しかし、学校を増やすことで、家の近くに学校がないため学校に通うことができなかった子供にも教育を受けるチャンスが生まれるのだ。経済発達していくためには教育は必要だ。未来のためにも教育はしっかりする必要がある。

#### (3) まとめ

このようにバギア村の長期的な開発のためにはいくつかの改善を行わなければならない。また、それぞれの分野は互いに結びついている。どれを優先的に行うか、力を入れるのか、など考えなければいけないことはたくさんある。まず、しなければいけないことは水の供給と道路の整備だろう。先程も述べたように水がなければ人は生きていけないし、農業のためにも必要だ。また、道路の整備は物流、情報、人の移動を可能にする。これにより、孤立することもなくなるし、産業の発展、経済の発展にもつながる。ただ、忘れていけないのが、環境についてである。開発はしばし環境破壊を引き起こす。特に途上国では数多く見られる。地球的規模で環境問題が議論される中、先進国も途上国もないのである。

今まで述べてきたことに共通することが一つある。それはバギア村だけではどうにもならないということだ。もちろん東ティモールだけでもどうにもならない。多くの協力が必要なのだ。開発には多額の資金と技術が必要である。無論、環境保全についても同じことが言える。途上国である東ティモールにとって、さらにはその途上国の山奥のバギア村にとってまかないきることは不可能である。世界中がバギア村、東ティモールの開発に協力することが必要だ。

今回、東ティモールに行った全員が感じたこととして、去年までの話とだいぶ変わっていたということである。今回のメンバーは全員が初めて東ティモールに行ったため、去年と比べることは難しいかもしれない。しかし、去年に行った人達の話とはかなり違っていた。東ティモール、バギア村が発展していることを感じざるをえなかった。たった一年でこれだけ発展したのだ。今後の東ティモール、バギア村が楽しみだ。

## 学生ボランティアに何ができるか、何をすべきか

私たちが今回行った東ティモール孤児院支援ボランティア活動も今回で3度目になる。私たちは、これまで大学で学んだことを元に現地でどんな活動ができるか、学生が主体となり考え、実行してきた。これまでの活動はうまくいったことばかりではない。国内での準備、現地で数々の問題に直面しながらも、先生方や周囲の理解、試行錯誤を重ねながら乗り越えてきたのだ。毎回一部を除いて、大半の参加者が海外ボランティアは初めてである。ボランティアの専門知識は授業や本から学んだことが多く、実地経験はない。私たちは、一学生ボランティア団体であり、資金力の面で弱いということもいえる。そのような中で、私たち学生ボランティアが日本とは全く異なる文化を持つ東ティモールへ行き、何ができるか、何をすべきか。今回このテーマについて参加メンバーに意識調査を行ったので、それを元に学生ボランティアに何ができるか、これからの文教ボランティアズの展望を含め考えてみたい。

私たちが現地でボランティアをするに当たり一番感じたのは、学生ボランティアであるがゆえに途上国開発の知識・ノウハウのなさ、資金力のなさである。

バギア村の一番のニーズは水道と道路の整備であった。しかし NGO のような大きな機関でもなく、補修のための専門知識も持たない私たちではとても解決できない問題である。私たちは学生として、東ティモールでの現地の問題・ニーズを目の当たりにしたわけだが、どれも時間・資金面でカバーすることは不可能だ。

また孤児院では昨年より生活環境が良くなっており、十分な量の食事を摂り、服もたくさんあるようであった。また私たちの他にもボランティア団体が入っており、支援物資の提供や、孤児院内の壁のペンキ塗りなどがすでに終わっていた。今までは、バギア村孤児院を支援していたのは文教ボランティアズだけだったが、他のボランティア団体も孤児院の支援をしていることを知り、改めて私たちがここでできることを考え直さなければならなくなった。

私たちにとって大切なのは、実際に現地の状況を自分の目で見、現状に対してどのように支援をしたら相手のためになるのか、ということを常に考えながら行動をするということだ。それには現地調査をし、現状を正確に把握し村人とコミュニケーションを取りながらお互いを理解することや、そのための言語力、交渉力としてのコミュニケーション能力が必要である。

私たちが現地で活動をするに当たり、学生では解決できない問題もあるが、それを解決に繋げるのは相手との対話であると思う。問題について相手がどのように問題意識を持ち、解決したいと思っているのか、また私たちが問題をどう捉え、状況を理解した上で解決の方法を相手と話し合うことが現地でボランティアをする上で重要なプロセスになる。

水道や道路などの整備は私達だけでは難しいが、それを解決に繋げるために東ティモー



ルの NGO や政府機関に現状とニーズを伝えることはできる。直接現場を見た私たちが報告することで、まだバギア村に入ったことのない NGO や政府の人々は改善のために動いてくれるかもしれない。

学生ボランティアは社会人と違い大人でも子供でもない。学生の立場であるからこそ大人と子供どちらの意見も客観的に理解することができる。学生ならではの柔軟な心を持って理解することが現場で大いに役立つと考える。

現地の開発においても、私達が村のことを知ると同時に、村人にも私達を知ってもらい、信頼関係を築いた上で、共に長い目でバギア村の開発に取り組まなければならない。

私たちは若く、自分の足で動いて調べたことを柔軟に吸収し、必要があればすぐに行動に移すことができる。昨年と比べ、東ティモール、バギア村の開発は日増しに進んでいるように感じた。私達は、より現地の発展に貢献できるよう開発のためのスキルを学んでいく必要性を感じた。

また、交流を中心とした面では衛生教育や環境教育のように、生活するにおいて何が問題で何が大切なのかを伝えることも重要である。日常生活で何かを大きく変えるというより、ちょっとした工夫でより安定した生活ができることが多いからだ。そのようなことを伝えていくことを今回の活動では行ったわけだが、これからも意識の定着の観点から続けていくことが重要であると考えます。

またこの活動で私たちがすべきこととして、私たちが、日本で東ティモールでの活動を一人でも多くの人に伝えることが挙げられる。私たちのように学生のうちに紛争地で活動をする機会はめったにない。そしてこれは現地に行った者の役目でもあると思う。

実際に現地で活動した私達が、現地の生の状況を伝える。一人でも多くの人に関心を持ち、このような国が今も存在することを皆が忘れないようにする。ボランティアの第一歩は知ることであり、正確に物事を知ることで行動するきっかけにもなる。つまりはできることから大きな視野で物事を考える。それがボランティアの基本精神であり、Think globally, act locally という言葉があるようにとても重要なことと言える。これは国内であれ、海外であれ変わらないものだ。その精神を持つ人が増えることで、私たちの輪はさらに大きくなり意味のある活動になる。

今回の活動を行い、これまで問題とされてきた孤児院の修繕も行い、教育に関してもファンドを通じて、十分な教育が受けられるようになることで子供たちに少なからずプラスになったと思われる。

バギア村孤児院での活動も、支援物資が行き渡り、私たちの存在が定着してきたので、今後はバギア村での支援を継続しつつ他の村の孤児院にも目を向け、周辺の村の支援を視野に入れた活動に発展させる必要があると考える。

私たちもより詳しく東ティモールの情報収集、現状を理解した上で情報を分析し、バギア村また周辺地域の発展において何が必要か事前に調査をすると同時に、現地の開発の支援のためのスキルを学び、実行する努力をしなければならないと感じた。

今回東ティモールでボランティアをするに当たり、周囲から「どうしてわざわざ海外に行くの?」とか「旅費を募金したほうが現地の人のためになる」「自己満足」と言われたこともあった。私達の活動のモットーは「学生だからこそできるボランティアをすること」である。今しかできない、私達にできることをしたいという気持ちがこの文教ボランティアズを動かしてきた。自分の目で途上国を見て、自分を見つめ直したいという思いとともに、子供たちとの触れ合いや、子供たちの未来への多少なりの貢献はある程度できたと思う。私達はこれからもこのようなボランティア活動を続けていきたい。



## 活動の反省

今回の反省を来年に生かすために、活動での問題点や反省点を挙げたいと思う。

### <時間>

国内でも同じであるが、集合時間を決めてもいつも全員が集まるのに予定時間を過ぎてしまった。また子供たちと遊ぶのに夢中になり、集合をかけてもなかなか集まらないこともあった。全ての予定を計画通り、時間通りに終わらすためには時間厳守は最低条件である。いつも決めた時間の5, 10分前に集まるようにしたほうがいい。時間にルーズになると、グループ全体がだらけた雰囲気になってしまう。全員の責任とけじめを持った行動はとても重要である。

### <行動>

日本とは違い、海外で日本人が団体で行動するのはとても目立つ。いつ、誰が狙っているかわからないので、各自の荷物、貴重品に責任を持って管理することが基本となる。危ない、また不信な人がいたら無視して去ること。もちろん単独行動は厳禁であり、自分の行動に責任を持ち、周りにメンバーがいるからと安心せず、常に周囲を意識して注意することが重要である。

### <チームワーク>

集団で計画を実行するには、それぞれが何をすべきか把握していないと計画が円滑に進まない。現地では移動や時間の都合上、その日でないとできないスケジュールがあり、日ごとにスケジュールを消化していくことで初めて計画が思い通りに進む。そのために各自が今日のスケジュールをきちんと理解し、そのためにどんな準備が必要か何をするべきか考えながら行動しないと、他の人任せになってしまい流されているだけになってしまう。何をやるにもその時に自分がすべき仕事を見つけ、率先して行動し、時にはフォローしあうことが必要である。相手を思いやり、たまには相手に不快感を覚えることもあるかもしれないが、寛大な態度で接し、注意すべきときにはしっかりと注意できるけじめも大事である。

### <積極性>

途上国でボランティアを体験できることはとても貴重な経験であった。東ティモールでボランティアができるという機会を十分に生かし、自分からどんなことでも学び取ろう、どんなことでもやってみようという心がけは私たちには不可欠である。自ら積極的に率先して行動することは、ボランティアにとって重要な要素のひとつである。また今回先生方にリードされることが多かったように思う。交渉において率先して生徒が行い、言葉が足りないところだけ先生方にフォローしてもらうようにするべきであると感じた。海外では英語が話せることが前提であるのは当然のことながら、交渉で自分の主張を言うことでさらに英語力が向上し、行動につながり、そのための関係者との調整においても学生が積極



的に参加することで、直に現場の状況を把握することができるからである。

#### <臨機応変な対応>

現地に行ってから予定が変わることは国際活動の現場では日常茶飯事である。もし治安の悪化などによる不測の事態が起こっても、冷静に判断し必要な情報を集め、状況を的確に把握した上で臨機応変に、皆で知恵を出し合い焦らず対応することが大切である。そのためには個々が危機管理意識を持ち、予想外のトラブルが起きても動揺せずに、危機を最小限に食い止める心がまえを持つことも必要である。

活動においても、今回の基金設立のように現地の状況を理解し、それを見込んだ上での臨機応変な対応が重要であると改めて感じた。やはり、そこにある状況に柔軟に対応し、克服・協力できる事柄であるならばこのような対応は重要であると考えている。

#### <体調管理>

バギアでは1人も体調を崩さなかったが、帰りのディリでの滞在では体調不良で休んだ者がでた。活動をするに当たり、体調管理は特に重要である。無理をせず、きちんと食事を取り、十分に睡眠を取ることが大切である。体調に異変を感じたら早めに対処する。1人体調を崩してスケジュールが狂えば周りに迷惑がかかるし、何より自分が活動に参加できないのはとても悔しい。体調が悪くなったときのために、風邪薬、下痢止め、胃腸薬は各自必ず持参したほうが良い。

水の問題においても、途上国での生水の摂取は危険を伴う状況が多々ある。東ティモールにおいても同じような状況なので、水はスーパーなどからペットボトルで買った。また体調管理に気を使うという観点からも、バギア村にて調理を行うときは野菜をペットボトルの水で洗うように心がけた。

#### <荷物>

物資の運搬は空港の荷物受け取りから荷物が出てきたときに即確認し、物資は常に見張っておく。東ティモール行きの便が1日に1便であるため、翌朝の便を待つためバリで1泊する際に空港に物資を預けたのだが、空港で荷物を一時預けるときは有料でも信頼できるところに預けるようにする。無料だと悪質なところでは後でお金を請求されることもあり、トラブルになりかねないからである。また税関で開けられたときのためにダンボールを閉めるガムテープ、紐などを用意しておく。飛行機にダンボールを積むときに、ダンボール箱が弱るので、荷物を受け取ったら箱の状態をチェックし、破れなどがあれば補修する。

個人荷物は、空港で自分の荷物が全て出てきたかどうか確認する。今回空港で預け荷物にした個人荷物が空港から出てこないという事故が発生した。海外の空港ではこのようなことはよくある話で、もし荷物が出てこなかったときのために、1,2泊分の着替えなどの必需品を別に手荷物として分けて持つのがよい。現金、貴重品は空港から荷物が出てこなかったときのために預け荷物には入れず、すべて身につけるべきである。出てこない場合、すぐに空港に連絡を取り荷物がどこにあるか確認してもらい、できれば目的地まで届けて

もらうように交渉する。また旅行会社にも連絡する。連絡が早ければ状況にもよるが 1, 2 日で手元に届くと言われる。損失は旅行保険に加入していれば保険である程度のカバーはできる。

#### <現地調達>

服や日用品は現地で調達可能である。食べ物は、日本にはない野菜や果物があり、現地でしか食べられないものを試してみるのも旅の楽しみである。

日本から持っていくのが難しい雑貨（なべ、掃除用具）や食料（肉、牛乳などの生鮮食品）は現地で調達したのだが、どこかの店に何があるのか正確にわからなかったことや、時間制限、日程の変更があったことで余計に買ってしまったり、欲しいものが手に入らなかったり、言葉が伝わらずに違うものを買うこともあった。

最後のフェアウェル・パーティーではバウカウで材料を調達したところ、荷物を詰めすぎたためにバギアにつく頃には痛んでしまっていた。またホームステイで孤児院を離れるときに野菜・果物の袋の口をしぼったためにさらに食べ物がいたんでしまったことから、傷みやすい物への対応に注意する必要がある。

#### <ホテル>

ティモール・ロッジ・ホテルでの宿泊の際に、同じホテルに宿泊していた現地の人が、私達のことを珍しがって部屋までついてきては、ドアの前で女子学生に「ここはあなたの部屋？」などと話し掛け、なかなか部屋に入れないということがあったので、部屋の周りに不信な人がいないか、戸締りがきちんとできるか安全確認をする。また窓がきちんと閉まらなかったり、カーテンに穴があいて外から見える状態になっていたり、シャワーの水が出ないところがあったので、部屋に入ったら全て確認し、不具合があったらすぐに対処をしてもらうようにすることは重要である。

#### <リトさんとオリベ이라神父とのコンタクト>

今回バギア村の状況を把握するのに、リトさん、オリベ이라神父の二方からアクセスをしていたが、リトさんとオリベ이라神父の間で情報の伝達がうまくいっておらず、オリベ이라神父には私たちがバギアで何をするか伝えることができなかった。リトさんとオリベ이라神父はそれぞれ別に、私たちのためにスケジュールを提案してくれたが、私たちは最初からリトさんの提案通りに活動する予定だったので、オリベ이라神父からの提案を断る一方、今後の孤児院支援をするためにオリベ이라神父にも協力を依頼し、理解を得なければならなかった。

これは、事前に情報伝達がうまくできなかったために起こったことで、これからはお互いのEメールを通してやりとりができるようになったので解決されていくと思うが、前もって受け入れ側に私たちの活動の趣旨、目的を理解してもらうことはとても重要である。バギア村では地方行政が確立されつつあるので、孤児院を管理するオリベ이라神父、アドミニストレーターにも私たちがいつ、どのような目的で、何をするのかを伝え理解・承諾を得る必要がある。これは、今後バギア村との信頼関係を作る上で重要なステップである

といえる。

#### <現地のニーズ>

昨年のデータを元に、学用品が不足とのことで募金を集め支援する予定だったが、実際現地では学用品は十分であると感じた。その代わりに水道管や道路を直してほしいといわれた。現地の状況はどんどん変化していて、昨年のデータではほとんど対処しきれないことが多く、上でも述べたとおり、事前に情報収集・情報交換をして、何がニーズなのかきちんと把握した上で活動することが必要である。支援が一方的になることは押し付けになり、ボランティアの本来の意味にそぐわないのと同時に、開発の観点からも望ましくない。

また、現地ではごみ収集のシステムがなく、ごみに対する問題意識を持ってもらおうと思い、ごみ問題について意見交換をするつもりだったが、アドミニストレーター曰く、「ごみ問題は二の次」と言われてしまった。先進国に住む私たちからしたら、ごみが散乱しているのは問題に見えるが、現地の人にとっては自分たちの生活に必要なインフラを整えることの方が最優先である。しかし先進国でも問題になっているごみ問題を、これから発展する東ティモールが課題としていくのは将来を見据えた上で重要になると思われ、その解決においてもやはりインフラの整備は緊急課題であり、私たちはNGO・政府機関に現状を伝え、少しでも問題が解決の方向に進むようできる範囲で実行するべきであると感じた。

#### <ディベート>

今回東ティモールに行く前と後に、ボランティアに対する意識などのディベートを行った。活動を全員が納得できるものにするために、お互いの意見を交わし考え方を理解することでチームワークの強化にもなり、自分の意見を言うことで自分を見つめ直すきっかけにもなるので、今後もディベートを重ねていくことでより内容の濃い活動ができると思う。

最後に、大切なことは、私たちの活動は周囲の方々の理解・支援なしには成り立たないということである。特に、今回は同行を見送りながらも、準備段階での指導と日本から活動を支えてくださった中村恭一先生をはじめ、現地での活動をアレンジして下さったりトさんや支援物資、募金をして下さった多くの方々の協力と励ましで、今回の活動の実行が可能になった。また今回の活動準備に初めから終わりまで携わり、現地でも様々な機会に指導をして下さった林薫先生、生田祐子先生のご尽力と配慮がなければ、途方に迷うことが多かったと思われる。これらの方々全員に、心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。





# 東ティモール活動者・後方支援者座談会

2004年 10月27日

## 「継続こそ大事」

### (座談会内容)

- 準備（苦勞、体験、状況、事前調査）
- 現地（思ったこと、感じたこと、体験、印象）
- 孤児院（思い出、感想、印象）
- 将来へ（思うこと、感じたこと、変化、今後）

### 座談会参加者

#### (現地活動)

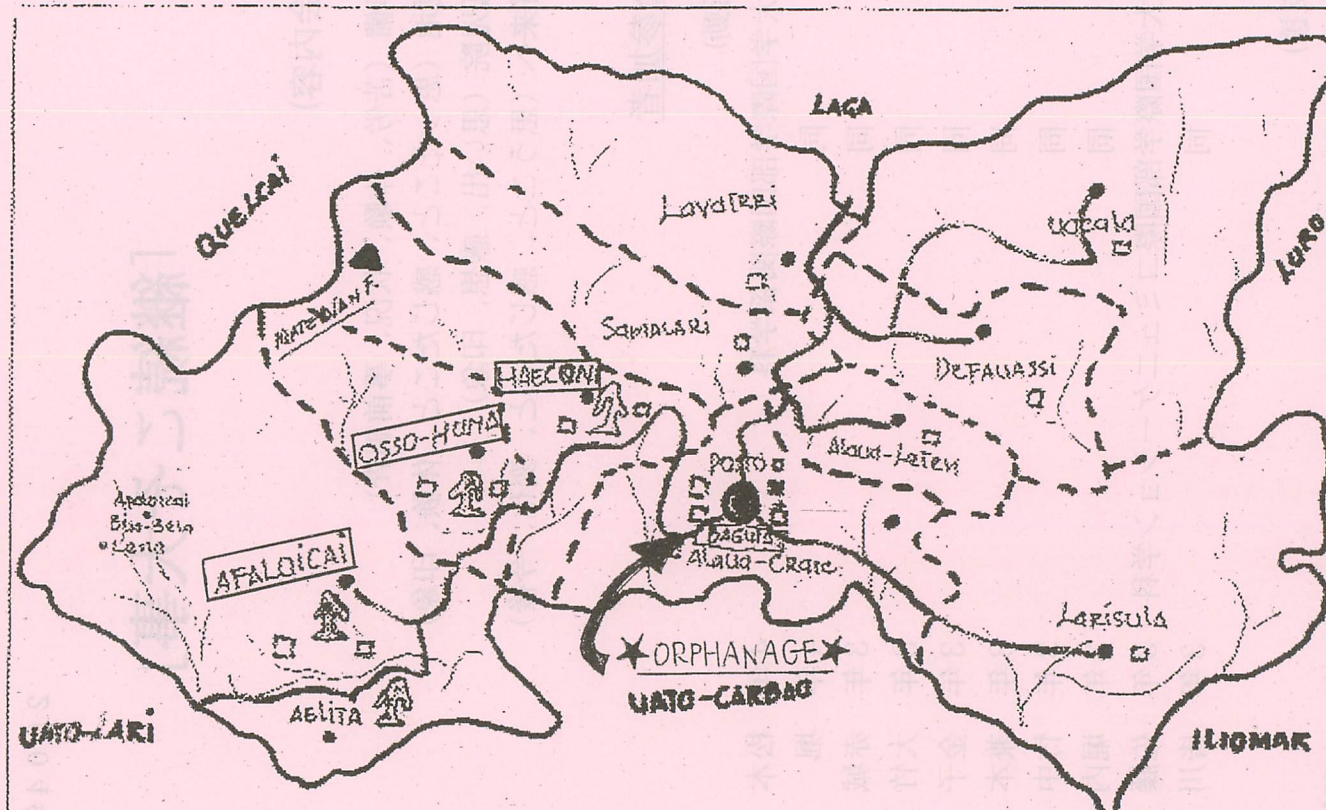
文教大学国際学部国際関係学科	4年	松本	興太（こーた）
同	4年	堀	千秋（千秋）
同	3年	赤城	早穂（さきほ）
同	3年	大竹	環（たまき）
同	3年	金子	直人（なおと）
同	3年	兼本	優子（ゆーこ）
同	3年	竹中	亮太（亮太）
同	3年	堀内	智文（トミー）
文教大学国際学部国際コミュニケーション学科	3年	佐藤	愛美（あいみ）
同	3年	皆川	真奈美（まな）

#### (後方支援)

文教大学国際学部国際関係学科	4年	白羽根	竜（りょう）
同	3年	内山	亮一（内山）
同	3年	堀部	健次（堀部）
同	3年	宮間	純（じゅん）



# MAPA DO SUB-DISTRITO BAGUIA



Chefe Suco  
LIURAI

1- DANIELAS SIMDES  
SUCO HAECONI

2- ANTONIO PIRES  
SUCO AFALOICAI

3- JACINTINO GUTERRI  
SUCO OSSO-HUNA

1- = POSTO

2- = SUCO

3- = ESTRADA do POSTO

4- = ESTRADA do SUCO

5- = IGREJA

6- = POLICIA

7- = ESCOLA

8- = HOETO

9- = VAREJA

10- =

11- = CASAS da Escola do Agente/ORFANATO

12- AGOSTO 2004

SUCO.

1- HAECONI-GRABOU →

2- OSSO-HUNA →

3- AFALOICAI-AELITA →

TURUTULIS

MAPA DO POSTO

PICTURE

SH. EURICO PIRE

バギア村地図

## 東ティモール活動参加者・後方支援者座談会

(準備)

トミー>準備段階とかどうでした？

こーた>やっぱり、何度も経験したりようはどうだった？

りょう>今回の参加者は全員が初めてでゼロからのスタートだったから苦労したんじゃない？準備段階とか、いろいろ大変だったけど、すごくみんな頑張ってたなあ。

今回は人も多かったし、一人一人細かい事を調べたから、スゴク準備されてたんじゃないかなあと思う。去年の春は6人でやりくりしてたんだけど、荷物を運ぶときも人数が少ないと制限があるし、そういったことも考慮しなければいけないし、けっこうハンディだった。

こーた>そうだね。俺も報告書の準備段階のところで書いたけど、一人一人に仕事をもたせて、それが結構出来たんじゃないかな。初めて経験した人たちはどうだった？

トミー>自分は最初恥ずかしかったんですよね。募金活動とか。でもやってるうちにそういうのもなくなっていったし。初めてだから、物資集めとか大変だったけど、今思えば懐かしい。金子はどう？

なおと>今回は初めての人ほとんどだったから、大変だった。自分が担当した物資では段取りが悪くて、今思えば、もっと効率よく出来たんじゃないかなと思う。

トミー>今回準備だけ手伝ってくれた人はどうだった？

堀部>募金活動のときとか、頑張ってくださいねっていわれると嬉しかったし。でも、中には態度の悪い人もいて辛かったけど、でも、それは人それぞれ考え方も違うし、仕方ないことだと思う。

トミー>今年はみんなが初めてだったから苦労したよね？やっぱり先輩の話とかでしか、情報を得られなかったしね。

こーた>これまでの報告書は役にたったよね？あの報告書っていうのはこれから、どんどん後輩に読んでいってもらいたい。

じゅん>友達とかに募金とか呼びかけて、興味を持ってくれる人もいれば持ってくれない人もいて…どうしたらいいのかなあって思った。

千秋>私は逆で、中学校と高校に話に行ったら、話した時間は15分とか20分とか短かったんだけど、反響がすごくて、物資もすごい量で、私の想像以上。まだまだ呼びかければ興味をもってくれる人いっぱいいるんだな、と思った。

じゅん>団体は食いついてくれるんですけど、個人は難しくて…

こーた>茅ヶ崎でも個人で物資を持ってくる人とかいた。

トミー>募金の時にチャラチャラした高校生とかしてくれたりしたしね。

こーた>それはあるね。もっと呼びかけていく姿勢が必要だと思う。



トミー>募金といえば会計とか大変だったでしょ？

亮太>大変だった！一円玉とかが多かったし。毎日一時間ぐらいかけて数えてた。それより大変だったのがフライトのこと。最初、知識もないのに旅行会社に電話して、わけのわからないこと言われて、最終的には君達行けないかもしれない、とか言われて。結局、生田先生の紹介でなんとかあったけど。やっぱ今回はスタートが遅かったから、次回からは早め早めにしていったほうがいいと思う。

トミー>中村ゼミの人が中心で、俺もそうだけど、そこに別のゼミのあいみ、まなみは大変だった？

あいみ>初め知らない人ばかりで、戸惑う場面も多かったけど、フレンドリーに接してくれて、活動にも参加しやすかったし、いろいろ聞きやすかったし良かったね

まな>調達と音楽を担当したんだけど、メニューを考えると、みんながどのくらい食べるのか、向こうにはどんな食材ならあるのかとか全然わからなくて、大変でした。でも、結局なんとかなって、献立もできたんだけど、日程が変わったり、あるはずの食材が向こうになかったり…。フェアウェルパーティーでは日本のことを知ってもらいたいから日本の料理を作ろうと思ったのにうまくいかなかった。

さきほ>準備といえば、紙芝居は一日で仕上げた。泊りがけで。でも、みんな積極的にストーリーも考えてくれた。

トミー>みんな大変だったね。やってみて、やっぱり準備段階とか帰ってきた後のほうが大変だったね。

### (現地)

トミー>現地はそんなに暑くなかった。あんまり、焼けなかったし。男は日焼け止めも塗らなかったし。

トミー>東ティモール人はみんないい人に見えた。本当に人を騙すのかなって思うし。

堀部>言葉は？

ゆーこ>孤児院では全部日本語だった。

こーた>テトゥン語の辞書は当てにならなかった。町では買い物する時とか、英語とジェスチャーで会話してたね。

トミー>通訳のギドさんはいい人だったね。

さきほ>ギドさんには紙芝居のときに日本語からテトゥン語にしてもらった。紙芝居の時は現地の人にわかりやすいように、ギドさんがいろいろ付け加えてくれて。拍手があったときは嬉しかったあ。

トミー>俺は初の海外が東ティモールだったんだけど、道路は中央線ないし、信号ないし、街灯はつかないし、原付自転車の二人乗り、三人乗りは当たり前だし。すげーなって思った。みんなの東ティモールのイメージは？

なおと>日本車が走ってたことに驚いたのと、タクシーが安かったことと、タクシーの車

が結構いい車で、タクシーの人は金持ちだな〜と不思議に思った。堀内と一緒に、初めての海外が東ティモールだったから東ティモール人っていうのがちょっとよくわかんなかったけど、ワールド・ビジョンの現地事務所で同じ年代の人たちと話したり、一緒にサッカーなどしたり、孤児院の子供と一緒に遊んだりすると、日本人とあまり変わんないんだなあっという印象だった。どこに行ったって同年代の人とかは考えてることも変わんないし、同じ事で笑えたりするんだなあって特に感じた。

トミー>他に初海外の人って誰が…

千秋>やっぱ言葉とか文化も違うし、もうちょっと英語ができないと意思疎通とかできないのかなって思ったんだけど、大丈夫だった。会話もジェスチャーで何とかできちゃったし、東ティモールの人たちって人懐っこくて、バギアへ行く途中に車から手を振るとみんな「わあ〜」って手を振ってくれて人懐っこ〜いっていうのは感じた。

トミー>環、どうだった??

たまき>海外に行くことも初めてで、やっぱり、日本でのボランティアと東ティモールでするボランティアでは、不安がありました。けど実際に行ってみて、以外に大丈夫でした。

あいみ>東ティモール（と日本の）差がすごいなあって思います。

トミー>…………ど、どんな!??

あいみ>交通機関もそうだし、インフラ?

トミー>車しかないしね〜…信号機もないしねえ。って、あったっけ?

みんな>ないよねえ〜。ないない!

こーた>電柱はあるんだっけ?電柱。ま、あっても…ね。

あいみ>先進国も面白いけど途上国もなかなか。発見がいっぱいあるしって思った。街を歩いてて。

ゆーこ>あたしと真奈美で一回バギア村のマーケットに買い出しに行ったとき、ほんとに、最初はちょっとそこらへんに座って、あ〜このパイナップルにしようかあ〜、って言って、ぱっと振り返ったらワーツと人がいて（笑）。それで1ドルって言ってたんだっけ?パイナップルをワンダラーって言ってるんだけどワンダラーの意味すら通じないの。だから1ドルでしょって言っても、違う違う違うって。みんなが助けようとするんだけど、通じなくて。でも買いたい物買えたから。

じゅん>え、後ろの人は何でさあ…

ゆーこ>わかんない。みんなで助けようとしてくれて。

まな>みんな1ドルでいいのを伝えてくれようとしたのね。お店の人に。

トミー>バギア…植林とか、清掃とか、え〜と。どうだった?

まな>植林は思ったより植林ばくなかった。

まな>なんか、もっといっぱいいろんなところに植えていくのかなって思ったら、記念植林みたいなそんな感じだった。

トミー>あいみは？

あいみ>バギア村よりもさらに奥地に行って、道とかすごくなかった？

こーた>すごかったねえ。

トミー>俺が気まずかったのは、車の中で隣がリウライと警察官で、俺どうしようって！

こーた>まあ普通の日本で考えるとね。村長と警察の人みたいだから。

トミー>清掃とかどうだった？ゴミ拾いとか。

なおと>ベッドとか、毛布とか敷いてあるのを一度外に出して干した。思ったより汚くて、叩いても叩いてもホコリが出てくる。よくあんなところで生活してたなって思ったし、自分たちもあんなところでよく寝たなあって。

トミー>結構孤児たちも手伝ってくれたよね。助かったわ〜。

こーた>本当にすごいホコリだったよね。

トミー>あと、ホームステイ。

千秋>わたしはリウライ家だったんだけど、なんか思ったよりきれいな家に住んでた。飾りつけとかすごくかわいかったし、ご飯とかも量が多くて、食べきれないよって感じで。一応お客さん用のお料理らしいんだけどおいしかった。リウライの話も熱かった。あれは本当にいい体験ができたと思う。バギアでは一番の思い出かもしれない。

トミー>そっちはどうだったの？お医者さんの？ほら、そっちには林先生がいたし、こっちは生田先生がいたし。

あいみ>でもなんかね、お話もご飯食べる前とかね、アガイシ、真奈美、愛美、お医者さんと子供で、何とか会話してたよね。日本語ではこれなんていうのとか。

あいみ>で、そこのお母さんが恥ずかしがり屋なのか、コミュニケーションが取れないから出て来ないのかわからないけど、どうやらそれが当たり前みたいだよな。

トミー>リト家は？

こーた>パパさんがね（笑）

ゆーこ>すごい怖い感じだから、パパと、うちら三人と、先生で最初シーンとしたような緊張したような感じで食べてて…ご飯はすごくおいしかったよね？

たまき&さきほ>おいしかった〜すごいびっくりした☆

ゆーこ>で、リトさんの一番下の兄弟女の子二人の、小学生と中学生の子がいて、その子達が結構英語できたから、これはなんて言うの〜みたいな感じで和んできて、もう本気で和みすぎて、大爆笑でご飯食べるみたいな（笑）

## （孤児院）

トミー>じゃ、孤児院いこうか。



さきほ>感動。感動。超楽しかった。えっと、行ったときからみんな明るくて、なんか、人見知りとかってあるの？っていうくらいフレンドリーで、すぐ和んだ。

トミー>え、初日とかどうだった？俺は結構戸惑ってたんだけど。みんな平気だった？

さきほ>ぜんぜん。

ゆーこ>戸惑ってた。

千秋>どう接していいかわからなかった。

なおと>言葉とかぜんぜんわかんないし、こっちが何か言ってもわかんないんだけど、向こうが子供だったっていうのもあったんだろうけど、何とかその辺はコミュニケーション取れたのかなあって。

こーた>トミー・アウグストゥ・コレガって書いてあったね。(コレガ：親友)

トミー>ベットを掃除してたときに、ベットにチョークでトミー・アウグストゥ・コレガって書いてあったの！チョークで！！それがうれしくてさあ！

こーた>そうそう。おい、書いてる、書いてる、書いてるって。

トミー>でも、ちゃんと掃除終わったときには消されてたけどね。きれいに拭かれて、雑巾で。でも、やっぱうれしかったなあ～って。

こーた>そういう心を持ってるっていいね。

トミー>星きれいだったねえ。

みんな>あれは、すごかったあ！

さきほ>12時過ぎると真っ暗だったね。

こーた>そお。星きれいだったわあ。

トミー>子供たちの瞳もきれいだったね。

こーた>子供たちの瞳がすごく良かった。

みんな>あ～良かったあ。

トミー>でも、みんなお気に入りには一人できたでしょ？

こーた>ああサンティーナ以外？

トミー>ああサンティーナ！

さきほ>アンジェロ！

ゆーこ>アンジェロも好きだし、ジュリオも好きだし…

たまき>アンジェロも好きだけど、ジュリオも好き。

千秋>ジュリスかなあ。

あいみ>アリスとか。

まな>アンジェロ可愛かったね。

こーた>あと、面白かったのが、アマルとか。眉毛つながってるの。

さきほ>帰りは号泣だよね？

ゆーこ>ほんとケンカした後の子供みたいに泣いたよね。

さきほ>でも、アンジェロ泣いてたよね。

こーた>泣いてたねえ。

さきほ>トミーも泣いてたよね。

トミー>俺もこそこそと壁に隠れながら。でも、こうたさん笑ってましたよね？

こーた>そうだねえ。でもほら、子供達がさあ、大人が泣いてるのみると悲しくなるじゃんと思って…。また来るよって。

トミー>ねえ、みんな最後は感動だったねえ。

### (将来へ)

トミー>じゃあ、帰ってきてからどうだった？行ってみて変わったこと、思うこと。

さきほ>行って紙芝居やってすごくウケて、嬉しくて、単純だけど、紙芝居作家にでもな  
ってやろうかしらって思った。

りょう>次やる時とかやっぱり、今回行った人が中心になるだろうし、そういった意味も  
含めて、これからもこの活動が続けばいいんじゃないかなということと、情熱を  
絶やさずにやっていけばいいんじゃないかなと。

みんな> (笑)

トミー>ですよねえ。じゃあ、行かなかったけど、準備した感想とかは？

じゅん>いろいろ集めて物資多すぎたとか聞いたんだけど…

ゆーこ>準備で、全然次は何やったらいいんだろうとか分かんなかったけど、それを乗り  
越えて、結局流れとか把握できてよかったなって思うし、あの孤児院の子達を伝  
えるには報告書のことも頑張ってやってまたなんか乗り越えるんだろうなと思  
います。

たまき>2年前のティモールと比べると行ってきてやっぱり生活水準がすごくよくなっ  
てるんだなって感じました。でもなんかディリとかバギアとかで水源とか電力とか  
のインフラの差が結構あって、なんかよくなるかなって思います。

堀部>写真とか見たら、俺もやっぱり行っとけばよかったなみたいな感じ。

トミー>今度、チャンスがあったら行きたいと思う？

堀部>それは思う。

千秋>実際現地で活動してみて、今になるとやってみて分かったことってすごくあつた  
し、ほとんど全て初めてのことだったから、自分のできることが増えたなっ  
て思う。なんか自分について考える時間が増えたし、目標に対してこれから何をや  
っていけばいいかなってというのがもっと具体的になって、それがすごく自分の中  
でよかったなって思います。まもなく就職ではあるけど、就職しても東ティモール  
でやってきたことは絶対生きると思うからすごくよかった。

内山>準備段階に入るまでがみんなエンジンがかかるのが遅かったってゆうのがあります。あと、今回の東ティモールのプロジェクトが必ずしも100%ではないと思うんで、来年以降100%に近づけていけるように、行って来たみなさんに期待したい。

亮太>帰ってきてから、自分でみたものを頭の中で整理したんですけど、やっぱりディリとかバギアって行った時は想像してたよりいいなって感じたけど、帰ってきてから考えたら、やっぱりあの首都はないなって。バギアのような所で一生暮らすとなると、病気にかかったらとか緊急事態になったときに、ちょっと無理だなって思いました。あと、報告会は今大変だけど、やっぱり俺らの活動に想像以上に募金も集まったし、いろいろ協力してもらってその責任を果たすことと、この活動は継続性が大事って言われてるけど、これからもうちょっと頑張っていきたいなって、そういう機会が与えられればもっと積極的に活動していきたいなって思います。

なおと>帰ってきてからはしばらくたったんだけど、早くも懐かしい。あと終わってみて、もうちょっと現地のニーズをあらかじめ集めなくちゃいけないなって強く思った。今回みたいに例えば、必要以上に一つの場所に物を持っていくとかじゃなくて、他の足りない場所に回せるように他の地域の情報とかも知れるように、一連情報みたいなのを知れたら、もっといい活動ができるんじゃないかと思います。

あいみ>発展段階にある、まさに動いてる国を見られて楽しかったけど、やっぱり大変だった。この活動は自分の中でも残していきたいし、この先もこういう信念みたいなのを忘れたくないなと思いました。

まな>東ティモールと聞いた時に、この国をあまりよく知らない人は、紛争や暴動とかおきて危険な国なんじゃないのかとか、国として成り立っていなかったり、生活ができてないんじゃないかなとか思う人はきっと多くて、私も行くまではそう思ってた一人だった。でも実際に現地に行ってみたらイメージと違ってて、すごくきれいな自然はあるし、人もみんなあったかくて笑顔でいい国だなと思いました。これから東ティモールっという国を知ってもらおう上でマイナスなイメージだけじゃなくて素敵なおところもたくさんあるよっていうプラスなイメージも一緒に多くの人に伝えていけたらなって思います。

トミー>楽しかったなって思うし、向こうの人の方がいい人たちで、笑えば笑いかけてくれたけど、日本でそれやると、誰も笑いかけしてくれない(笑)。ちょっと変な目で见られる。そういう意味では日本のほうが貧しいのかなあと思った。あと、今回東ティモールで思ったのが、もっと開発しようってことになってたけど、でも開発されたら、電気が通ったらあの星空が見られなくなっちゃうなあとか、あのたくさん残ってる自然とかなくなっちゃうのかな、とか思って。向こうの人達は開発してほしいとか言うから、開発もしたいけど、自然も残したいって思う。

今回行って、開発って何だろうみたいな迷いや、どうすればいいんだろうっていう悩みが自分の中で生まれて、これからもっと勉強したいなと思った。英語とかも含めて。

こーた＞今回、みんなで長い間やってきて、最初は話し合いとかしても全然意見でなかったよね。誰かが何か言っても返ってくることもなかったし…。それから見ると、今自分の意見をちゃんと言えるっていうのがボランティア活動の一環として身につけられたんじゃないのかなって、この座談会をして思いました。これから数年は東ティモールには行けないけども、ここでの活動が継続していくということにやっぱり俺も何か動きつつ、働きかけたい。あの子達がいしっかり成長していく過程を見守る責任が僕らにもあると思う。これからもまだまだ活動は続いていくものだから、しっかり今回のいいものを活かしていけるように努力していかなくてはと思いました。

トミー＞今回行った人、行かなかった人、この活動参加してよかった？みんな自分の為になったよね？後悔する人もいないし、みんなよかったなって思えるって、いい活動だったなあ。



## 東ティモールボランティア活動会計報告

### 2004 年度募金活動結果

場所	円	ドル
湘南校舎(在学生・学校職員・OB)	61,876	50
茅ヶ崎駅前募金活動(7/3・4・10・11)	198,730	
その他	46,458	
合計	307,064	50

今回の寄付金は学生、大学教職員・OB からの援助、茅ヶ崎駅前募金活動、各参加者の母校、アルバイト先や JICA の職員方々、毎年私たちの活動を支援していただいている東京都調布市立第五中学校からの援助などによって集められた。

募金活動は、今回、前回の活動の参加者と中村ゼミ、林ゼミの有志で行った。学内では昼休みに 4 日間、学生に募金を呼びかけ、教職員の方々へはチラシを作成して各研究室や事務課へ配布した。OB の方々も快く募金に応じていただき、在学生・学校職員・OB からの援助は 61,876 円になった。

茅ヶ崎駅前の募金活動は 7 月の第 1、第 2 の土日に行った。文教ボランティアズの活動が茅ヶ崎市民の皆様に浸透してきたこともあってか、多くの方から募金していただくことができた。合計は 198,730 円となった。

学内、駅前の募金と各個人が集めてきた募金を合計すると 307,064 円と 50 ドルとなった。これは私たちの予想以上の結果であり、東ティモールがマスコミに取り上げられることが少なくなった今でも人々から忘れられていないことが伺える。

### 募金用途報告

国内支出項目	合計(円)	ドル
清掃用具	4,140	
大工道具	1,302	
物資輸送費	31,203	
その他支援物資	4,019	
残金	266,400	50

日本国内では、支援活動を行うための物品で、現地では手に入らないものまたは手に入る確証が得られないものを購入した。内訳は孤児院清掃用品に 4,140 円、孤児院改修のための大工道具に 1,302 円、その他現地での衛生教育のための紙芝居材料費など 4,019 円だ。また募金と同時に集められた文房具や衣服などを梱包し、文教大学から成田へ輸送する費用に 31,203 円が充てられた。

外貨交換	円	ドル
7/30(1ドル=114.49 円)	199,212	1,740
8/3(1ドル=113.70 円)	67,083	590
残金	105	2,380

現地支出項目	ドル
輸送費(成田からディリ)	209
バギア村孤児院トラストファンド	500
バギア村孤児院支援品(食料、調理用品)	216.95
バギア村孤児院支援品(改修用品)	47.25
バギア村孤児院支援品(清掃用品)	41.5
バギア村孤児院支援品(その他)	16
バギア村孤児院ペイント(人件費)	110
バギア村孤児院ペイント(材料費)	128
残額	1111.3

成田からディリへの支援物資輸送費はわずか 209 ドルしかかからなかった。これは事前に西鉄旅行に航空会社に対して私たちの活動の趣旨を説明し、荷物超過料金の値下げをしてもらうよう要請していたからだ。西鉄旅行はこの要請に快く応じ、私たちの活動の大きな助けとなった。

東ティモールでは主に首都のディリ、第 2 の都市のバウカウで孤児院支援物資を調達した。バギア村に入る前に私たちの計画した活動に必要な物資を購入し、一旦バウカウへ戻った際に孤児達の世話をしているジョスティンに必要な物を聞き、その中から本当に必要と思われるものを私たちで判断し、購入した。食料、調理用品は米、フルーツ、鍋などに加えて薪なども含み 216.95 ドル。改修用品は電球、ドアノブなどを購入し、これに 47.25 ドル支払った。清掃用品はモップやバケツなど 41.5 ドル。その他に枕カバー、テーブルクロスなどを 16 ドルで購入した。また、孤児院の壁の塗装がかなり剥げており汚かったため、地元の学校教師にペンキ塗りを依頼した。これは人件費に 110 ドル、材料費に 128 ドル支払った。最後に、バギア村孤児院ほかいくつかの孤児院を担当しているオリベイラ神父にトラストファンドとして 500 ドルの寄付をした。

外貨交換	ドル	円
8/24(1ドル=114.49 円)	560	64,115
9/14(1ドル=107.1 円)	551	59,012
合計	0.3	123,232
活動後受け取った募金		15,000
OISCA へのコピー用品寄付		-17,640
次回活動繰越金	0.3	120,592

帰国後、米ドルを円へ換金した。レートが 2 つに分かれているのは、事情により国際学部国際ボランティア委員会から拠出されるレンタカー、ドライバー代を立て替えていたためだ。換金後の残額は 123,232 円となり、これに帰国後いただいた 15000 円の募金を加え、私たちの生活費である共益費から立て替えていた OISCA 東ティモール事務所に寄贈したコピー用品代を精算し、最終的な次回の活動への繰越金は 120,592 円となった。

私たちは募金活動で 307,064 円という予想以上の募金を集めることができたが、120,592 円の次回繰越金を残した。これは事前にバギア村の現状が把握できなかったことが原因だ。バギア村には E メールや電話などの通信手段はない。あるのは個人の持っている携帯電話と警察の使用する無線だけだった。そのため私たちは日本にいる間にバギア村と直接連絡を取ることはできず、文房具や衣服以外の現地のニーズは分からなかった。このことからバギア村に到着してからニーズを調査し、使途を決める予定であった。しかし予算に合った資金の用途を見つけることができず、貴重な募金を有効に使うためにも次回繰越金を多く残す形となった。この問題に関しては、次回の活動から東ティモールのいくつかの教会を担当しているオリベイラ神父やバギア村とその周辺事情に詳しいオイスカ農業研修センター所長のリト氏らと連絡をとり事前に現地のニーズを把握し、活動計画を立てることによって改善する。

私たちの活動は文教大学の学友、教職員や学外の支援者から募金や物資協力により支えられている。また、募金だけでなく学友や茅ヶ崎市民の方々からいただいたあたたかい言葉は参加者全員の大きな励みとなった。航空運賃や宿泊費、食事代などを参加者個人に直接関係する費用はそれぞれの努力で参加者が自己負担した。

文教ボランティアズ東ティモールボランティア活動をさまざまな面から支援していただいた多くの方々に対して参加者、活動関係者は心から感謝している。

## お世話になった方々

(順不同・敬称略・すべてお世話になった時点での肩書き)

新屋敷 道保	オイスカ (OISCA) 常務理事
永井 彰	在東ティモール 日本国大使館 参事官
坂部 有佳子	在東ティモール 日本国大使館 専門調査員
海内 保男	文部科学省大臣官房国際課専門官 (東ティモール駐在)
和田 泰一	JICA 東ティモール駐在員事務所 駐在員
牧野 耕司	JICA 東京事務所企画部
飯田 鉄二	JICA アジア第1部
西野 隆司	育英工業専門学校 デザイン工学科 講師
辻村 直 (現地では通称テレサ)	育英海外ボランティア (Ikuei Overseas Volunteers)
辻村 智	育英海外ボランティア (Ikuei Overseas Volunteers)
リト (ミランドリンド・アパリシオ・グテレス)	OISCA 農業研修所所長
ギド (Guido)	元オイスカ研修生、通訳兼運転手
フィデル	運転手
アガイシ	運転手
オリベイラ (Oliveira) 神父	
ウォン (Wong) 神父	
亀崎 善江	カトリック聖母訪問会シスター/内科医
ゴ キッペン (Go Kipeng)	東ティモールワールド・ビジョン代表
フィオーナ ハミルトン (Fiona Hamilton)	東ティモールワールド・ビジョンスタッフ

### 国内募金・支援物資の協力者

茅ヶ崎市民

神奈川県茅ヶ崎市立萩園中学校の生徒と教員

神奈川県横須賀市不入斗中学校の生徒と教員

神奈川県横須賀市立横須賀総合高校の生徒と教員

東京都調布市立第5中学校

埼玉県立不動岡高等学校の生徒と教員

文教大学学生、教職員、卒業生、父母

茅ヶ崎市国際交流協会



## 現実から学ぶ

国際学部教授 林 薫

常日頃、授業で「開発」や「貧困」を語っているが、これが現代の学生にどの程度のリアリティーをもって理解されているのか気になることがある。日本が先進国に分類されるようになってから久しく、貧困も社会の記憶として消滅しつつある。戦後の高度成長に終止符を打った第1次石油ショックから既に30年以上の年月が経過している。今の学生の大部分が生まれた1980年代前半は、“Japan as No.1”と日本の経済パフォーマンスがもてはやされていたが、概ね小学校低学年の年齢でバブルも崩壊し「失われた10年」に突入していたはずである。「経済成長」も学生の年代では実感として理解するのは容易ではないかもしれない。多くの開発途上国が直面する「貧困」に対し、「開発」を通じて「成長」を実現するというダイナミックなプロセスを理解し、グローバルな知識として共有することはきわめて重要であるが、それは同時に今日の日本においては相当に困難な仕事であることを認めざるを得ない。

今回の東ティモール・ボランティア活動の意義を一つ挙げるとすれば、現在「復興」から「開発」のプロセスに移行しつつあるその現場に入り、孤児や村民、関係者と共に生活することにより、「貧困」や「開発」のリアリティーを少しでも直に接することができたことである。孤児がどのような背景で孤児院にて生活するようになったのか、孤児院の運営にはどのくらいの費用がかかるのか、村民の現金収入はどのくらいあるのか、村民の生活状況はどうで何が足りないのか、村民が貧困から脱出するためには何が必要で何が制約条件か？ これらについて理解するには1週間強の滞在では充分ではないことは言うまでもないが、子供たちとの生活や村民のコミュニケーションの中から、少しでも実体験として理解することができたとすれば、情報や説明を駆使した教室での授業にはるかに勝ったといえる。さまざまな制約があることは言うまでもないが、国際学部の教育の中に、このような体験型の学習を組み込んでいくことが、国際理解のためにきわめて重要である。

ボランティアの意義は「開発」や「貧困」の理解にとどまらない。ボランティア活動を通じて接した東ティモールは、資金や人材その他のリソースを欠き、将来にきわめて多くの課題を有している。帰国後、何人かの研究者や実務家、経済人と話して一様に受けた反応は「あのような小さなところが独立してもやっていけるのか？」という冷淡なものである。熱心にボランティア活動に従事した学生たちの顔を思い浮かべ反論した。しかし、そのような冷淡な反応に理由がないわけではない。経済界には、インドネシアの石油の対日供給や中東からの石油輸送ルート確保の見地から、インドネシアの「解体」(disintegration)に懸念を示す意見が多いと聞く。「東ティモールに出来たことが何故できないのか」とインドネシアの他の分離運動が勢いづくのではないかと。それは地域を不安定にすることにつ

なかるだろう。小さなエスニック・グループや宗教グループがナショナリズムを中核にあくまでも自らの国民国家を形成しようという運動を展開していくことについては、民族紛争の激化を招きかねず、国際政治上の難問といえる。ボランティア帰国直後の9月上旬、ロシアの北オセチア共和国で、オセット人とイングーシ・チェチェン人の対立に起因すると思われる悲慘な学校占拠事件があったことは、このことに注意を喚起するものである。

学生と現地でこの点に関するディスカッションを行った。東ティモールの人々の独立への意思が最も基本であること、インドネシアによる（懐柔策としての）さまざまな投資では「東ティモールの人々の心を買えなかった」ことでは意見は一致した。私から学生に提起した議論は「大国の辺境」か「世界の辺境」かという「究極の選択問題」である。「世界の辺境」を選んだことにより得たものは何か？ 大きな国際的注目を浴び国連、日本などからの援助を獲得できたこと、さまざまなフォーマル、インフォーマルな国際的ネットワーク（ポルトガル語圏諸国やカトリック）の支援を得られるようになったことは大きなゲインであったといってよい。身の丈にあった小さな国民国家であるが、世界的なネットワークが結びついて開かれた存在であり、国家機能の不足する部分をネットワークが代替する。東ティモールのケースも、現在、進行中の“グローバリゼーション”と“ローカリゼーション”の一つのあり方である。

東ティモールでは現在、嘗て併合派と独立派に分かれて争った傷を修復するための和解の努力が行われている。大国の抑圧でもなく、民族分布が入り乱れた小国における絶え間ない民族紛争でもないシステムを構築するとしたら、役割を必要な機能と制度能力に相応するように「再定義」された国家と国際的なネットワークによる国際社会（グローバル・ガバナンス）が一つの解決策になりうるだろう。先進国としては国際的なネットワーク構築が進んでいるとはいえない日本の現状を見ると（EUやASEANのような連合に属しておらずFTAなども2004年夏時点ではシンガポール、メキシコと締結しているに過ぎない）、東ティモールは日本よりも発展段階を考えれば先進的かもしれない。それでは、日本はどのような国際ネットワーク戦略構築をすればいいのか？ これが、学生と私自身に提起した課題であるが、まだオープン・エンドのままである。（了）

## ティモールロロサエとの継続的な友情のために

ティモールロロサエ（陽が昇る場所）と、ティモールの人たちは、自分たちの国をこのように呼んでいます。20万人の犠牲と24年にわたる抵抗運動の後、21世紀に入って独立した初めての国です。世界で1番若い国の人びとには、どんな現実があるのかを自分の目で確かめるために、10名の学生たちは重い荷物を背負いながらでかけました。

首都ディリから四輪駆動の車で、紺碧の海を望む海岸線を5時間走り、バウカウという町からは険しい山道を3時間登ったところに目的地の孤児院のあるバギア村があります。水牛が群れる草原や山頂から眼下に広がる大自然のパノラマをながめながらの旅でした。この孤児院を支援するようになった経緯は、2002年の春、中村恭一先生がゼミ学生を連れて東ティモールに行った際、援助の必要な孤児院がバギア村に存在するという情報を得て、訪問を始めたのがきっかけでした。<sup>1</sup>

この活動のユニークさは、国際協力の現場視察に留まらず、途上国の人のところにでかけて行き、ともに生活をする体験を通して、現地の人々と「友情」を築いていくことにあるかと思います。バギア村の人たちの言葉で1番ここに響いたのは、アニータという年長の女の子が、私の手にしがみついて、Do not forget us!（私たちのことを忘れないでください）と言った言葉です。この最後の“us”の重みには、彼女は個人的な思い出として私たちとの関わりをとらえていないと感じられました。また多くの方が「ここまで来てくれて本当にありがとう」と声をかけてくれました。決して、物質的な援助を求めている言葉ではなく、東ティモールという国が地球上に存在し、人々がどのように生きているかを、世界の人々に証ししてくださいというメッセージが込められているのです。A Friend in Need is a Friend Indeed. という言葉のとおり、本当の友だちになると相手の必要に気づきます。それは、チャリティー（施し）をするのではなく、東ティモールの人々と友達になり、同じ視点から必要を考えること、それが私たちの活動の目指す方向であるように思います。そこに本質的な国際開発援助の原点があるのではないのでしょうか。

紛争のあった地域や途上国へ学生が出かけていくことは、事故や病気の可能性を考えると決して容易なことではありません。しかし、このリスクを背負った上で参加している学生たちの行動は、とても慎重でチームワークの良さは、先進国への旅をする学生グループとはどこか異質なものが感じられました。

この報告書は、学生たちの活動を後輩たちに伝えていくために、国際ボランティア委員会が企画をしました。紙面だけでは学生たちの多感なところで受け止めたすべての思いを表すことはできないかもしれませんが、お読みくださった方にとり、国際協力やボランティア活動だけではなく、また私たちが生きていく上の目的を考える上で、何かヒントになることが隠されていることを願います。尚、活動報告は、9月に国際開発高等教育機構・

<sup>1</sup> 林,生田（2004）「東ティモールにおけるボランティア活動と持続性ある開発への一考察」文教大学国際学部紀要第15巻第2号にプロジェクトの経緯と背景の詳細を記している。

文部科学省共催シンポジウム<sup>2</sup>においてパネル展示、10月に学内と茅ヶ崎市国際交流協会にてプレゼンテーション、12月には、青山学院大学<sup>3</sup>にて英語でプレゼンテーションを行います。今回、報告を掲載することができませんでしたが、2004年春には、中村ゼミ4年生の白羽根竜君が、東ティモールオイスカの活動である「東ティモール植林ボランティア」に個人で参加しました。その時には、東ティモールのオリンピック候補であったマリアナさんを自分で探して、マラソンシューズを文教ボランティアズから贈りました。

報告書作成の過程では、新潟地震が起こり、被災地へのボランティア活動も同時進行で行ってきたこともあり、学生たちにとっては目のまわるような忙しい生活でした。出版費用をできる限り押さえるためにも、製本作業以外は、表紙デザイン、校正等も含めて大部分を学生たちの手で完成しました。特に今回は、高度な技術を要する写真のページの編集にあたり、情報学部の藤掛ゼミの五十嵐麻衣さん、助手の藤掛美穂さんにお世話になりました。

最後になりましたが、このボランティアプロジェクトをスタートし、今回は国内準備と後方支援としてご協力くださった国際学部の中村恭一先生、参加せず準備だけを手伝ってくださった中村ゼミ生、林ゼミ生たちにここからの感謝を送ります。

国際学部助教授 国際ボランティア委員会委員 生田祐子

2004年11月24日

---

<sup>2</sup>2004年9月30日 国際開発高等教育機構文部科学省共催シンポジウム「わが国の国際平和協力分野の人材育成強化における大学の役割」にて。

<sup>3</sup>2004年12月19日 国際学部塩沢先生のご協力により、全国の大学生が参加するオーラルプレゼンテーションフェスティバルにて、英語でパワーポイントを用いての報告を行います。



製作 文教ボランティアズ  
発行日 2004 年 11 月 24 日  
発行 文教大学国際ボランティア委員会  
神奈川県茅ヶ崎市行谷 1100  
電話 0467-53-2111  
e-mail : [knkyo@shonan.bunkyo.ac.jp](mailto:knkyo@shonan.bunkyo.ac.jp)  
: [bunkyo\\_vol@yahoo.co.jp](mailto:bunkyo_vol@yahoo.co.jp)  
協力 文教大学国際学部  
AD 広報学科 3 年 五十嵐麻衣  
印刷 株式会社 三光堂印刷  
神奈川県藤沢市本町 1-3-33



文教ボランティアズ